殺人鬼の美談

centurio

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人鬼の美談

【Ｎコード】

Ｎ４４１０Ｑ

【作者名】

ｃｅｎｔｕｒｉｏ

【あらすじ】

異世界「ヴェルティアス」には殺人鬼がいた。名はエスト・ヴェイユ。貧困層、病人、障害者などの社会的弱者ばかりを選んで殺す、卑劣漢である。神の一声によりこの世界を訪れた好奇心旺盛な女子高校生アムは、ある都市でエストが殺人を行った現場に遭遇した。死体を目にしたアムは動機をエストに問い質すが、返るのは沈黙ばかりである。かえって興味をそそられたアムは、殺人の理由を探るため、エストに同行することを決めた。お転婆少女と無愛想な殺人鬼――彼らの行く先には、何が待っているのか。そして、アムがこ

の地に喚ばれたその理由とは……？

第一話：制限世界の死の談義（前書き）

◆登場人物◆

「……」

――「殺人鬼」　エスト・ヴェイユ

「だからさ、私たちが楽にしたげるよ、ねっ？」

――異世界の少女　アム

「どうして……、どうしてっ！」

――余命数カ月の女子大学生　コレット・クラメル

「あなたが、やったんですか……？」

――コレットの親友　アリス・モルガン

第一話：制限世界の死の談義

とある学生アパートの一室。コレット・クラメルは、心を際限なき絶望に、体をシーツがよれよれのベッドに横たえていた。

『続いて、世界中で発生している連続殺人事件のニュースです。四大陸で既に百二十人以上を殺害した「殺人鬼」が、今度はズィーベンクレーターに現れました。』

何もかもが億劫だった。漆黒がその舌を伸ばし舐め回したような闇の中で、僅かな月光を浴びながら、瞳孔が開いていないだけの死人の顔で、ただここに存在している。明かりを点けるのも、友人が作っていった夕食に手をつけるのも、ぽつぽつと水を漏らす蛇口を締めにいくのも、聞きもしないラジオの電源を切るのも、皆みんな面倒だった。

それでもほんの僅かな気力を振り絞った。糊付けされたように重い体を横に転がし、ベッドの枕側、この部屋ただ一つの窓から覗く、砂銀のちらめくような星の海と、そこに優雅に漂う真ん丸い月を拝もうとした。

月の見事な弧が、窓枠から顔を覗かせる。私はほんの少しだけ、荒みきった心に安寧を取り戻した気がした。なけなしの気力が払底し、体は星の重力に順ずる――。私は月に夢中だった。月はいい。いつだって、真ん丸だ。

床に鼻を打ち付け、恍惚的感覚から引き戻される。

つーんという、化学の薬品を嗅いだような嗅覚情報が、ベッドから落ちた現在の状況を把握させた。布につく虫でも見えそうな距離に、淡い桃色のカーペットがあった。鼻血でも出ただろうか。暗く

て確認できないが、そんなことは、どうでもいい。
筋肉の腐敗した不死者のように、私は顔だけを上げ、目線を上げ、再び、星海を切り取る窓枠を仰いだ。月の下側が、近隣の建物の屋根で隠れている。

その屋根の上には、人。男女の二人組みと思しき影が、背中を合わせるようにして立っている。かたや背中の粗末なマントを秋の夜風になびかせ、かたやその美しく長い髪をさらさらと躍らす。金色の満月を背に、それらは麗しく映えた。

世の中は回っている。
多くの普通の人々が、各々然るべきことをして回している。所帯持ちの家主は今日もその家へと帰り、今か今かと待ち続けた家族に迎え入れられる。学生たちは学業、部活動を終えて集まり、身の程を知った安めの店に入って、それなりの味に舌鼓を打つ。学問への情熱冷め遣らぬ者たちは、湧水の如き知識欲に食欲を洗い流され、ひたすら研究へと打ち込む――。

先の見えない山道に放り出されたようだった。
優しかった母親は病で死に、無責任な父親は一人っ子の私を捨てて姿をくらました。親戚は寡少、隣人との繋がりも薄く、それでなくとも家族の生活は父、母、私の三人で完結しがちだった。
残された私はあと一年もすれば成人。養護施設に入るような歳ではない。国からの金銭的な社会保障だけを享受し、底無し沼の水面を裸足で渡るかのような不安定な暮らしを余儀なくされた。

理不尽だと思った。
親を鬱陶しがること、それが皆無だったかと問われれば、否むのは誤りである。だがだからといって、親という後ろ盾の喪失までを望んだわけではない。

心に淀みが生まれたのを、当時の私は感じ取った。一人では抱えきれなかった。誰かのせいにしなければ、膨れ上がった醜悪な感情が臨界に達すると思った。誰のせいだ？　誰がこうした？　誰が私を苦しめる？　誰が、誰が、誰が……

誰が――憎悪の泥の塊を投げつける対象が……見つからなかったわけではない。だが、それを真に受けて考えることは、人が人たる理性をして抑えさせていた。その時は、辛うじて。

ラジオがくぐもった音で今日のニュースを読み上げる。人殺しのニュースだった。どこにでもあることだ。特に興味はない。

『被害者はズィーベン市のスラム街で生活する子供八人です。子供たちは金銭的な問題などから育児を放棄され、出生届も提出されず国の保障が受けられない状態で育ったと見られます。』

全身がキリキリと痛んだ。私の身体は、内側よりゆっくりと貪られていた。

自覚した時は、ただ身体の痛みだった。真実を知るとそれは心の痛みに転化し、やがて理性の膜を破る針へと変貌した。

私は母と同じ病を発症していたのだ。医者にかかった頃には、もう手の施しようのない程度まで進行していた。診断医は肩をすくめた。治癒術師は頭を抱えた。執刀医は何度も首を横に振る。万策が尽きていたのだ。

私は、遂に恨んだ。

恨まずにいられるものか。親が憎い。そうだ私は親が憎かった。一人は死に、一人は逃げ、私をただ絶望させるだけでは済まなかったというのか。命までこそげ取るのか。どこまで私を貶めれば気が済むのだ。この世に、どうして私は生を受けた？　死ぬためか？

……いずれヒトの命が燃え尽きることは知っている。ならば如何にして死ぬかが「死」に与えうる違いというものだ。八十年ほどの生を全うし、自然の必定に則り静かに眠るか、親の呪いじみた病に身を食われて自然の四半も過ぎぬうちに朽ち果てるか。

誰が後者を喜ぶ？　私は不幸だった。このまま待つばかりで死を迎えれば、その死こそがまた新たな不幸となり降り積もろう……。

期が近く、理に反し、自己に因らない「死」は、死するまでの私の生活をも一変させた。

友人とまともに顔を合わせなくなった。身の回りの世話はしてもらっているが、私はいつも背を向けている。私が頼んだのではないし、深く関われば関わるほど、私の存在が友人の周りから失われた時、その心を大きく穿つことだろう。

私は、死する前に、私自身を世界から切り離そうとしていた。少しずつ「私」の必要性を、「私」が世界に占めるスペースを小さくしていった。川の水が、上流の大岩を徐々に砂へと変えるように……。

それでも私の残りの生は苦痛だった。時間というものを、これほどまで鬱陶しいと思ったことはない。時間――それは、人に何かをさせるために存在するのだろう。何もできない私には、ただ側を通り過ぎて、自分を嘲笑うだけのものにしか感ぜられなかった。好きなことをして気を紛らわすのも限界だった。今更何を始めたところで、それが実るのを目にすることは難いだろう。

後世に継ぐ？　――それは、生き続ける周囲の人間が勝手にそうした、生き続ける人間のための感動の物語でしか無いでしょう？

その中で私だけは、絶望で凍結した坂道を転がり落ちるのだから。

『この「殺人鬼」は国際的に指名手配されており、目撃証言は数多

く、これまでに統一国の警察軍との戦闘も度々発生しましたが、「構成術」による抵抗が激しく、未だ逮捕には至っておりません。』

ラジオは情報を伝える。されどもそれは、普通という水準を保って生活する人々に向けてのものだ。私はまるで蚊帳の外。所詮世の中は、大多数を占める「普通の人々」のためにしか回っていない。ただ死を待つだけの少女に優しくはない。

疎外感。友人の話に耳を傾けても、ラジオの放送を聞いていても、本を読んでも、何をしても……私が触れる情報の全てが、私とは違う世界の事柄に思われてならない。

自分だけが、この世で異端なのだ。透明ガラスの鉢を泳ぎ回る金魚のようなもの。水中の金魚が見るものは全て、同じ水中ではなく空気中での出来事だ。透明ガラスは普通と異常を分ける壁。私は母の子であることで、この世から常態という箒で掃き出されたも同然だった。

常識的、健康、素面、中庸――普通であるための簡単な条件を全て満たした世の人のために、ラジオは語る。

『「殺人鬼」の特徴は、貧困層や病気の末期患者などの社会的弱者ばかりを殺害することです。』

ハッとした。

ラジオのモノラルスピーカーの音声に、ではなかったと思う。

死人の面で見上げる窓のその奥、屋根が半分を覆い隠す月影に、先程までは浮かんでいた「二人」の姿が無い。それもそうか、秋の夜風の冷たさは、「涼しい」を通り越している、屋根の上は危ない、いや、もう落ちてしまったのか？　――そんな思索は速やかに掻き消された。

ガタリ、満月の光を遮って、何者かの両足が窓枠にかかった。
新しいとはいえない木製の建材が音を立て、窓枠に降り立ったものが決して鳥ほどの軽さでないことを物語る。私は戦慄した。全身に鳥肌が立つのを嫌でも感じる。金縛りに遭ったように身動きが取れない。こんなときにも、ラジオは多くの正常な人々のため、ベラベラと情報を吐き出している。

『目撃証言により、犯人のおおまかな外見が明らかとなっています。』

窓の外、足をかけた何者かは、ところどころに大小の穴が開き、端々がみすぼらしく破れた布を閃かせていた。

『犯人はボロボロのマントを着用し、――』

月光の照り返しが、その者の顔を淡く彩った。頬にあたるであろうそこには、不自然な無数の線が走っている。

『顔や腕には多数の古傷があり、――』

手が、胴の脇の出張ったものにかかる。引き抜くと、蒼穹の光を吸い込んだが如き蒼色の、長く鋭い何かが現れた。

『刀身が青色の長剣を所持しているということです。』

「何者か」は、それを両開きの窓の間へと差し込み、隙間をなぞるようにゆっくりと下へ動かしていった。中央の金属製の鍵が、スポンジケーキか何かでも切るようにあっさりと溶断される。
内開きの窓は、セキュリティなどはなから存在しなかったかのよ

うに音を立てず開き、蒼く光る長剣を手にした男が私の部屋に両足をついた。薄汚れ、原型が朧なほど傷ついたマント、服ともども切り裂かれたような、全身をほぼ隈なく走る傷痕、青色の幻想的な光を放つ、美しい長剣……ラジオが語った、「殺人鬼」の姿そのものだった。

「……」

男は静かに目を閉じ、自分以外のものを待つように、ただそこに佇んでいた。「異常な」光景だった。こうもぬけぬけと家宅侵入をしてのけるのか。

「そぉれっ！」

場にそぐわぬ明るい女の声。男とはただひたすらに対照を行くその声は、一瞬を置いて窓の下に消える。

「わわっ！」

衝突音の後、女は悲鳴を上げた。目を凝らすと、窓枠に一対の腕がかかっている。腕がもぞもぞと蠢いて体を持ち上げ、やがて、長髪を後ろで一つに結わえた小柄な少女が姿を現す。

黒のトップスに赤のスカーフ、下も黒色のプリーツスカートという、奇特な恰好だった。彼女はささっと「殺人鬼」と背を合わせるように立ち、無様な登場から一応の体裁を取り繕った。

異常の度合いが倍加した。もはや理解の範疇に自分はいなかった。異常は異常を引き寄せるものなのだろうか――。

「えーっとさぁ」

少女は、黒の支配する狭い部屋の中で、蕾が花開くように陽気な声を放った。

「私たち、何しに来たと思う？」

私は見下ろされていた。特に術も施されていないのに、身体が言うことを聞かない。逃げようとする素振りでもするのが普通だろうに……私はもう、普通の世界の住人ではなくなっていた。少女はゆっくりと言葉を継ぐ。楽しそうに……誕生日を迎えた友達に、おめでとうを告げるように。

「あなたを、殺しに来たんだよ。ねぇ、『エスト』？」

背中合わせの男「エスト」が眼を開き、両の瞳が私を捉えた。瞳は腰に佩いていた長剣の刀身のように蒼く光り、見た者の視線を逃すまいとするように妖しい。

……魅入っていた。これが、釘付けというものか。他の事物一切への興味を洗い流すような、甘美な輝きだった。私もまた、それに心酔することに寸分の疑いをも抱き得なかった――。

男の両目の魅了から意識が戻った時、私の首筋には、男の長剣があてがわれていた。

殺される……！

今頃になって、死への実感が猛烈な水勢となって湧き上がるのを感じた。男の傷だらけの腕がさっと横に振れれば、たちまち私の首は刎ねられてしまう。

「誰……あなたたちは……！」

バイオリンの情熱的な独奏のように、私の声は激しく震えた。少女はふふんと小悪魔じみた笑いを頬から下に蓄える。

「知ってるくせに。認めたくないんでしょう？　『殺人鬼』よ。あぁ、それとも私のこと？　これから死ぬ子に教えてもって思ってたけど。私の名前は『アム』だよ」

「殺人鬼」だ。限られた時間より早く、私に死を運んできた。

「どうして……、どうしてっ！」

叩きつけるように叫ぶ。首のあたりが、少し温かい。

「ほらほら、動くと血が出ちゃうわよ？　『どうして』なんて、聞いて呆れちゃう。たとえ間接的にでも、親に殺されるのが嫌だったくせに」

男が、初めて口を開く。

「突然変異した細胞が臓器を侵す病。病葉（わくらば）はひとところに留まらず、侵し飽きれば血流によって他の臓器へ転移する。複数の臓器が餌食となっては既に手遅れ。治そうにも治癒術師と患者、両者への負担が大きすぎる。そう珍しいことでもなかろう。どんな金持ちでも、どんなに著名でも、何も出来ず、なされるがまま死んでいくだけだ」

アムが後を続ける。

「この病気はね、親からもらうのよ。『感染』なんてもんじゃない。ココの言葉に置き換えるなら、『呪い』に近いわね。この病が子供に受け継がれるのは、老い衰えて死ぬほかに、もう一つの『生命の

理』なんだから」

理――そんなもの、受け容れられるはずがない。それではまるで、私が早死にするために生まれてきたみたいじゃないか。

私の愚かな両親は、無意識に「呪い」をかけて私を産んだ……。それは殺すために産んだのだと結果からしていえる。私は……

「どうして……っ！」

目尻から耳のほうへ、温かいものが伝った。何のために、涙が流れる？　生まれたときから枷のようについていた、「呪い」のために？

「辛い？　苦しい？　あはははっ。あなた、死ぬまでそうやって泣いているつもり？　涙で呪いはすすげないわよ。あと何カ月か、何週間か知らないけど、泣いて余命を費やすの？」

頭の中が、憎悪と悲嘆に塗り潰される。滾々としたネガティブで漆黒に、漠々としたニヒルで真っ白に。

「うわあああああぁぁぁぁぁぁぁッ！」

思わず顔を覆った。声を嗄らすばかりに叫んだ。人と触れ合い、言葉を交わすことを拒絶していた私の喉は、そう何べんも叫ばぬうちに嗄れ果てた。

「だからさ、私たちが楽にしたげるよ、ねっ？　ほら、エスト！　見てないうちに、やってみなよ！」

もう何も見えなかった。普通のための世界から目を背け、生まれ

たことに唾をして、生きることを切り捨てた。私に光は無い。私はもう、光を見ない。私はもう、光を見られない。

「どうせ……自分で死ぬ勇気も無いんだから……」

「あぁっ……」

そんな情けない声を出したのがその場の誰だったのか、今となっては分からない。

コレット・クラメルの友人アリス・モルガンが、首を斬り落としたと同時に部屋へ躍り入ってきたのである。精神を蹂躙されたコレットの悲鳴は、開放された窓から外の学生アパート群へと響き渡り、それを聞きつけたアリスが、予め渡されていた合鍵を用いて部屋の扉を開き、友人の骸を目の当たりにしたという次第である。

暗がりの中で、アリスはほぼ黒色の血だまりの中に跪いた。屍の胴を抱え、顔にでも寄り添えば、惨劇の余韻は画になったことだろうが、首から分かたれたコレットには、それをしたくともままならなかった。

「あなたが、やったんですか……？」

代わりに、アリスはコレットの右腕を取り上げて手を握った。エストは青の長剣を鞘にしまうことで、その問いに対してささやかに答えを表示した。

「どうして殺したんですか！　この子は……まだ生きることが出来たのに！　もう少しだけ、生きることが出来たのに！　生きてて良かったって、そう言ってくれるまで、私が一緒にいてあげようと思

ったのに！」

エストは塔のように屹立していた。聳え立ち、不動だった。やはり待つように。

「あなたも！　ここにいたならどうして止めてくれなかったんですか！　あなたもこの人の仲間なんですか！　見過ごすなんて……許せない！」

アムは部屋の一隅に体育座りしていた。アリスの、散った命を源とする強烈な罵声を一通り全身に浴びると、開き直ったように立ち上がった。

「うっ……うるさい、うるさいなぁ！」

開きっ放しの窓の方へ向かい、窓枠に足をかけた。

「ほら、行こう、エスト！　ぼーっとしてたら捕まっちゃうよ。いくらザコな警察軍でも、数に物を言わせたら、どうなるか分かんないよ」

アムが窓から飛び降りる。エストはアリスのほうを一瞥し、同じようにして闘争を図った。

「逃げるんですか……！　どこまで非情なんですか！　人殺しッ……、殺人鬼ッ！」

ボロ切れのマントが一瞬月光を遮り、そして、消えた。

「コレット……、コレット……！　いやあああああああぁぁぁぁぁ

あああああっ！」

満月の夜のアパート群に、二人目の悲鳴が反響した。

学園都市ゼクスにおいて、コレット・クラメルは「殺人鬼」の百二十一人目の被害者となった。悲鳴を聞きつけた他の学生の通報により警察軍が出動したが、時はすでに遅く、「殺人鬼」は闇に紛れて逃げ去ったという。

噂好きな学生たちの間では、巧みに警察軍の手を逃れ世界中で殺人を行う「殺人鬼」の話題が、不謹慎ながら注目を集めていた。

数人の学生が、この「殺人鬼」の噂に尾ヒレをつけた。『「殺人鬼」は、奇妙な服装をしたドジな女と共に行動している』――。それは警察組織からすれば単に共犯者の発生でしかなかったが、学生にとっては、好奇心をそそり話題を拡張する魅力ある要素となった。女は学生たちと同年代だとする説があるから、なおさらである。

彼らは時に面白おかしく「殺人鬼」を語った。彼らがコレット・クラメルと違うことは言うまでもなかった。彼らは、今のところは「普通」という名の絶対的な障壁によって、「殺人鬼」の凶刃から守られているのである。

第一話：制限世界の死の談義（後書き）

人は何に悩むのか、死ぬ前に何を考えるのか、死にどのような意味があるのか……そんなことを考えながら書いています。
基本的には毎話、一人は死亡するお話ですので、そういうのが苦手な方にはごめんなさい。

２／２６　文章にいくらか改行を増やしました。
　これで携帯だと一画面に一回以上は改行が入るようになったかと思います。

３／１７　文章に、これでもかってくらい改行を増やしました。
　ネット小説の標準はこのくらいでしょうか。

第二話：第二世界の意の談義　―１―（前書き）

◆登場人物◆

「気になっていたんですけど、この世界では朝からこんなに食べるんですか？」

――異世界の少女　アム

「私の研究した古代の書物の中にね、異世界より来たりし若者が言葉を伝えた、という記述がある」

――機術都市ズィーベンの考古学者　ジント・フレーゲ

「昔の人だって空想物語＞ファンタジー＜を事実らしく書きたかったのよ」

――ジントの妻　イーダ・フレーゲ

第二話：第二世界の意の談義　―１―

「アム」というのが、ここでの私の名前だ。ここには「漢字」なんて文化は無いから、私の名前には音以上の意味が無いことになる。表音文字だけを使う国では皆こんな感じなのだろうと、初めてローマ字で名前を書いたときから早くも異国の雰囲気を感じ始めたのだった。

――私は今、新世界にいる。

見たこともない風景があり、知らない人々が生活し、その間には聞き慣れない言葉が飛び交う世界、そこに私がいる。それを最初に自覚させたのは、何よりも自分自身の名前だった。

窓辺の机を離れ、部屋の一方の壁全面に広がる世界地図の前に立った。国ごとに別の色を割り当てられた陸地の全貌は、私の知るそれではない。

始め私はこれを、私の知らないどこか小さな諸島の地図だと思っていた。それを大きく引き伸ばして刷り、ここに貼ったのだと。だがそれは違った。これは「世界」だった。現実とは異なる、全く別の世界。

ここの人々は、彼らの世界を「ヴェルティアス」と呼んだ。「地球」ではなかった。この土地の言葉を覚え、カタコトで人々に「地球」という固有名詞を尋ねたが、誰一人としてその単語を知らなかった。

私だけが決定的に異質だった。この世の法則から外れたような存在。理に従わない異物。それを知ったとき私は、たとえこの世に災

厄が訪れようとも異世界の住人たる自分だけが取り残されそうな、本質的孤独感を覚えることもあった。

が、私はそのことに身を震わし続けることも、元の世界へ帰る願望を抱くことも無かった。私を案じるであろう家族の存在も、感情の一振りで頭の中から弾き出した。

……私は飽いていたのだ。変化の無い日常に。不満を感じていたのだ。それを黙って与え続ける周りの人間に。私の倦怠とフラストレーションを、タバコの残り火を踏み潰すように解消したこの世界から、私がどうして帰ろうと思うだろう。

「ヴェルティアス」は私の夢、理想だった。私は谷山阿夢ではなく、「アム」として生きる。退屈な日常は、私の背中でも見ていればいい。私はこの両手で新しい世界を受け止める。

そう、決めた。

――訪れた朝は、新しかった。

「あの時は、まさか山菜採りの最中に『異世界からの旅人さん』を見つけるとは思わなかったよ。ぶっ倒れてたから、そりゃびっくりした」

世話になっている家の主人、考古学者の青年ジント・フレーゲは夕食の席でそう言った。彼の妻、イーダ・フレーゲは、食後にお茶を淹れて私だけに寄越した。ジントはその臭いに小さく顔をしかめる。

「どうして驚いたり疑ったりしないんです？　普通なら別世界から来たと言う人なんて、頭がおかしいとしか思われないのに」

ジントは少し困ったような顔をした。どうやらそのような反応が偏見に思えるようだ。

「私の研究した古代の書物の中にね、異世界より来たりし若者が言葉を伝えた、という記述がある。過去にはそういう事実があったということだ。さすがに十年に一回、とかそんな頻度ではなかったようだがね。しかし昔の人は嘘をつかない。何も不思議なことじゃない」

ジントは自信たっぷりに言ったが、イーダは馬鹿なことを吹き込まないでと表情で露骨に示した。

しかし彼女も昔の物には興味があり、そういう縁でジントと結ばれたという。だが彼女はより現実的に物を見るタイプで、異世界からの旅人など古代の人間の夢物語に過ぎなかろうというのがその書物に対する見方のようである。

「昔の人だって空想物語＞ファンタジー＜を事実らしく書きたかったのよ」

とその一言で火蓋を切り、口論が始まった。

考古学的発掘物について激しく意見をぶつけ合うのはこの家庭の日課のようだった。私はそれを苦笑いして見守りながら、イーダの淹れた茶を一口啜る。

異世界の味がした。

苦味と渋味を先陣に、酸味が舌の裏をくすぐってさらに五味がぽつぽつと顔を覗かせる不思議な味わいがあった。

この茶を口に含むのは既に何度目かだが、未だにこれが葉の抽出液とは信じ難い。決して美味いものではない。それはイーダも重々

聞かせて私に飲ませたが、不味くともそれが怪奇な味覚であることに私は無上の価値を感じていた。これがよく知る緑茶や紅茶の味わいであったとしたら、私はここにいる意味を疑っただろう。

「それでも、イーダさんは私を邪険に扱ったりしないんですね」

第三者の私が口を出し、ひと時の休戦を言い渡す。まるで「夢物語」のように現れた私を文句も言わず家に置き、イーダがどう思っているのか日が経つごとに気になっていた。

「そんなことはいいから、早めに寝なさい。疲れているでしょう。慣れないうちは、何もしなくても疲労が溜まるのよ」

言ってイーダは残りの茶を無理やり私の口に注ぎ、私を寝床へ促した。

フレーゲの家はかなり新しく、寝室と呼べるものが三つある。そのうちの二部屋はジントとイーダが一つずつ使っているが、残りの一つは都合よく空き部屋だった。

付き合いの狭いジントとイーダには来客を泊める機会はほとんど無く、考古学者という職業ではそもそもそんな余裕を持たせるほどの稼ぎがあるわけでもなかった。

壁紙は水色や桃色のような明度の高い色調で統一され、絨毯は触り心地が頗る良く、部屋の出入り口は段差が出来ないよう気が配られていた。

一面の世界地図だけは、この部屋で私より後輩だ。私に現在地を教えるのにジントが貼っていった手書きの一枚である。

釈然としない気分で、ごろりとベッドに転がり込んだ。頭はきち

んと枕にあるが、足はベッドをはみ出して木材に当たり、寝心地は今ひとつだった。このベッドは、妙に小さい。私は中背だ。

ジント・フレーゲとイーダ・フレーゲという人間が分からなかった。落ち葉敷き詰まった山麓で私が発見されてから、二週間の間私を預かっている。金銭的余力は無いはずだった。

ジントの著す本の売り上げだけがフレーゲ家の財布を潤し、またその多くは次の研究資金へと充てられるからだ。私はこの世界にとって、身を不自然で鎧ったような存在。謂わば異物であり、そう容易に受け入れられるはずは無かったのだ。

体を仰向けに転がし、子供騙しな星模様の無い空色の天井を仰いだ。

フレーゲ家には何かが欠けていた。気の合う夫婦二人には、家計は苦しいながらも幸福な時間があった。この一部屋には空虚が蔓延るが、今は私が仮に満たしている。午後には外の世界に黄色い声が混じり始める。

私の存在は、異物なのか？　いや、そうではない、混じり始めている、少しずつ溶け込んでいる。――何故？　私とヴェルティアスは水と油。この部屋は得体の知れない乳化剤。壁も、床も、天井も白が基調。私は「アム」なのか？　別の誰かなのではないか？　私は私として存在しているのか？　ここにいるのは――

私は……「私」は……。

靄のかかり始めた思考に眠気が重くのしかかった。

ふと意識が逸れると、私は三大欲求の一つの重圧に屈した。

右手人差し指の先がびっしと地図の一点に突き立つ。

せめて自分の居所くらい覚えておかなくては、今後の行動の指針すら立ち得ない。この朝、世界の縮図と少女の指先が触れた場所には、「ＺＺｉｗｐｐｅｎ」なる表記があった。

英語慣れした私には多少気味悪い綴りであるこの単語の読みは「ズィーベン」。ジント曰くこの世界に伝わる古代語とやらで「七」の意味を表すそうだが、発音だけならどう聞いたってドイツ語である。

ズィーベンはヴェルティアスでも有数の大都市だそうだが、ジントの家は郊外と呼ぶのも憚られる町外れにあるので、その発展の様を見る機会はまだ無かった。

指先を中心とした等半径の円周上に連なるのは山脈である。プレート移動や火山活動で隆起したのではなく、かつての「神々の戦い」で中央部が窪んで出来たものといわれている。大地にこれほどの大穴を穿つ戦いとはどういうものかと感嘆したが、イーダには「それだってファンタジーさ」と一蹴されてしまった。

この山脈は「クレーターリム」と呼ばれ、私はその麓に倒れていたそうだ。ズィーベンだけではなくヴェルティアスの主要都市はほとんどがこのようなクレーターの中心に存在し、神々の戦いで出来た順番に古代語の数詞がそのまま名称としてつけられている。

「アム、入るわよ」

ガラッ、という扉の音で、地理の知識を整理していた思考が生活へと呼び戻される。

「朝ごはん、食べなさい」

電気式蚊取り線香のような形状の「ラジオ」が、五拍子の奇妙な音楽を奏でて一日の始まりを演出していた。

そのＡＭ放送のような音質には、昭和時代に戻ったような錯覚をせずにいられなかった。ラジオは地球では当たり前を通り越して古臭いものになり始めているが、この世界でかなり新しい技術なのだという。地球との文明レベルの違いを感じた。

フレーゲ家の朝食。ダイニング・テーブルにはジントとイーダが隣って並び、向かい合った一つの席は空いていた。私は一時、朝食の芳しい香りを忘れ、その椅子に見入っていた。もしその席がここに無かったならば、二人はこの食卓をどう囲んでいたのか。

「座って」

イーダは言って、微笑んだ。私の場所に向かって、笑いかけた。私は、まるで何年も続けてきた習慣の如く、その椅子に座す。

「どうしたの？　元気無いのかしら」

イーダは声の調子を少し変えた。

「二週間だものね。ホームシックにもなっちゃうわね」

どこかずれて解されているようだが、自分でも何故こういう気分にさせられているのか分からないので、家を偲ぶ寂しがりということに今はしておこうと思った。

食卓に上がるのは、朝食にしては豪勢な数の皿だった。

イーダが彩り鮮やか、形状様々な小皿を、私の前に勧める。主食は生地を練って平らに伸ばし両面を焼いた、固いパンのような噛み応えの粉物。主菜は深い傷でボロボロになった、少し青みのある獣肉（切り落としではないらしい）。

その他副菜は、採ってきた山菜の浸し物や甘辛くて黄白色の何か、甘みと渋みが強烈な根菜の煮物など。飲み物は腐敗臭にも似た独特の香りを醸す動物の乳、私には例の「健康茶」だった。

「気になっていたんですけど、この世界では朝からこんなに食べるんですか？」

ジントは口に粉物を運ぶ手を止めて、

「いいや、最近、イーダが張り切りすぎなだけだよ」

と妻に目をやる。イーダは大皿料理を取り分けながら私の方に微笑みかけた。私はその目を見て笑い返そうとしたが――やめてしまった。

「ところでアム、特技はあるかい？　私は地面や岩に手を当てて、土とは組成の異なる物質があればその位置が大まかに分かる。浅い深度に限るがね。化石や遺跡、水脈などがそうだ」

ジントが腐敗臭の乳を一口で飲み干した。漂う臭いには口呼吸で対処する。これを一気飲みすることが、既に一種の特技ではなかろうか。ちなみにイーダも同じような地中探査の特技を持っていて、それが二人の仲に一役買っているのだと彼はノロケたが、それはどうでもいい話である。

「それって……『魔法』みたいですね」

ジントとイーダは首を傾げた。魔法という言葉が一般的でない世界。いや、実在しないという点では地球でも一般的でないが、事情は違う。

「この程度の特技だったら、それぞれ方向性は違うけど、誰だって持っているものよ。『構成術』ってんだけどね。物質を分解したり、組成を変えて強化したり、液体に流れを作ったり。私たちは、地上からでも地中に異物があるのを認識出来るのよ」

まるで魔法だった。個々人の能力にはかなりの制限があるが、彼らのいう「特技」は、私の世界では幻想の産物としてしか存在できない。

「使い方も様々だ。仕事に活かしたり、それ自体を趣味にしたり、試合でちょっとズルしたり……あとはまぁ、犯罪に使うバカも少なからずいるようだな。普通より罪が重くなるから気をつけろよ。私たちは至って健全、考古学の調査に役立ってもらっている。いやむしろ、特技が私を考古学に進ませたのかもしれない」

特技……私にそんなものがあっただろうか。非現実なものはともかくとして、自己紹介で堂々と披露できる特技は皆無と断言できる。堂々と「特技は特にありません」と発言して、周りを困惑させたことならままある。なるほど、自己に由来する生きる楽しみが欠けているわけだ。

「特技なんてないです。だから、見て楽しめるものにばかり目が行っちゃう。将来のことも全然考えてません。犯罪をする気もないですけど」

ジントは頭で手を組んで背もたれに寄りかかった。

「そうか。何も持っていないのか。我々と違う世界ってのは、秀でる能力の基準も違うんだろうな」

「『地球』でも、私には何の取り柄もありませんよ」
「そうはいっても、悲観はするなよ。まっさらというのは、悪いことじゃない。特化するものもなければ、縛られることもないんだ。それに」

彼は横目にイーダを瞥見した。正しくは彼女だけではない。彼女と自分の、間を見た。

「余計なものを授かって、大切なものが手に入らなかったら、辛いだろう」

心持ち、その声のトーンは低かった。ジントはそれから書斎へ向かい、イーダは背中を向けて後片付けを始めた。私の存在そのものが、この食卓に招かれざる話題を招来したように思われた。

夕刻には寒気が肌に滲み入る季節になった。
あれからさらに二週間超がフレーゲ家にて経過した。

合わせて一ヶ月弱である。イーダの心配していた健康的な問題は、これといって悪い様相もなく現在に至っている。
現地のゆるい時間感覚に適応し、肌がむずむずするような独特な肌触りの着物も着慣れ、鼻をつく香りの動物の乳も何とか飲めるようになった。

ゆえに、異世界の衣食住文化に「順応する」楽しみには、そろそろ限界が見え始めていた。「何かあったらいけない」という理由で、ジントとイーダには遠出も止められている。
最近一番面白いことといえば、近所の公園で知らない子供と戯れ

ることくらいである。いよいよ異世界においても、狭隘な生活範囲に嫌気というものが差してきた。贅沢？　感覚が変？　いや、私は、好奇心に尽く忠実なだけだ。

夕食が済み、三人の他愛ない会話に花が咲いた。

卓には緑色の液体を含んだ瓶がある。この世界特有の、強烈な緑色の果実を発酵させた「果実酒」で、私の世界でいうワインのような立ち位置の一般的な酒類である。

発酵期間の短い安価な一年物で、ジントは「飲みやすいから敢えて選んでいる」と主張しているが、そこに財布の事情が少なからず絡んでいることは、一ヶ月を過ごした経験から推し量るのは難くない。グラスに注がれた果実酒を、ジントは特に理由もないが得意げに口に運んでいた。

話題は主に、この世界のことだった。

考古学者としての苦労話、近所のおっちょこちょいなおばさんの話、最近イーダが読んだ本の話、ジントの日常生活への積もり積もった愚痴……。ジントとイーダの夫婦と、そして私。出身の世界を異にする私は、彼らと徐々に仲を深め、家庭に溶け込んでいった。

私は、あの子供臭い趣味の部屋という住処以上に、この家庭において居場所を確立してきたと思う。ジントとイーダは私の元いた世界についての言及を少しずつ減らし、私をヴェルティアスへと受け容れた。

ジントのグラスが、カラン、と音を立てる。

私は私として、相変わらずここにいる。変わったのは、ジントとイーダなのかもしれない。私がここに居着こうとしたのではなく、私がここにいられるように、彼らが接し方を改めてきたのではないか……そう、思うことがあった。彼らの譲歩は、ひとえに私のためのそれである。だから、余計に辛い。

そろそろ頃合だと思っていた。いつまでも彼らの世話になっているわけにはいかなかった。それに、せっかくの異世界を、今の私に許された狭い範囲だけ見て満足するなど私には出来ない……！

木製のテーブルに両手を激しく突き、身体を持ち上げた。衝撃によってジントのグラスからは緑色の液体が飛散し、ジントはそれ以上に飛び上がった。イーダは何事かと目を丸くしている。

「私、この家から出ていくよ！」

心の内をさらけ出した。今後どうするのかも、出来るだけ具体的に伝えた。

ズィーベンの市外へ出て、住居と職を探し、一人で生きて行く。フレーゲの家庭にこれ以上迷惑と心配をかけてはいけない、新しい生活を求めている、ここにとどまっていては、より広い世界へ踏み出せない、今まで世話になった恩は、いつかきっと返す、定期的に手紙も書くから――。こぼれた酒のアルコールが揮発するまで、私は一方的に語った。

二人は、何を思っただろう。

打ち明けて、余計に心配させることになったかもしれない。賑やかな日々が終わって寂しくなると感じただろうか……。私の旅立ちはきっとその程度で、二人は難なく元の生活に戻るだろう。私は束の間の闖入者だ。今以上に、この家庭には深入りすべくも無かった。

果実酒の糖分が、そろそろ固まってこびりつこうとしている。

二人はどうにもならないものを、考えに考えた。何を言われても、私の決意には小波ほどの揺らぎも生じない。やがて、酔いの醒めきったジントが口を開き、普段より数倍重い空気を吸って、答えを吐

き出す。

「……分かった。行って来なさい。きっとこういうものなんだろう。手を引きすぎるのも、良くないんだろうな。誰だっていつかは一人で歩かなくちゃいけない」

イーダはジント以上に悩み、数分して同じ結論に帰着する。

「そうだね。これ以上甘えちゃいけないね。私たちも、アムもね」

イーダは大きく深呼吸した。それは、流星が現れて消えるように短い三人暮らしへの、はっきりとした告別だった。

「ねぇ、アム。ラジオの受け売りになっちゃうけど、一つだけ約束して。いつかきっと帰ってきて、新しい生活で見つけた大切なものを、私たちに教えて頂戴。いい？」

天にも昇る気分だった。イーダの示したたった一つの条件を、私は快諾した。

「うん！」

夜は知らぬ間に更けていた。明日は色々忙しいよと言われ、私はイーダに早く寝るよう忠告された。廊下を寝室へ向かうところで、敏感な聴覚は図らずも二人の会話を拾った。小声で交わされるそれは、極めてプライベートなものである。

「嬉しかったんだろう？」

「ええ、嬉しかったわよ。でも、本当はもっと嬉しい『カタチ』を、

私たちは手に入れられるはずだった」
「そいつは耳が痛い。でも、俺たちじゃどうにも出来なかった。少し遅れただけだと考えよう」
「遅れすぎて、一ヶ月しか置いておけなかったじゃない」
「それでもいいんだ。最後に立ちあえたことにはなったんだから」
「……そうね。私たちは、まだ幸運なほうなんだわ」
「あぁ。俺たちは一度落とし穴に嵌ったが、そこで地下遺跡を発見したんだよ」

対象物＞オブジェクト＜の省かれた会話からは、彼らの負の全貌は不明瞭にしか知り得なかったが、私は心中で密かに謝意を表し、足取り静かに床へ就いた。

第二話：第二世界の意の談義　―１―（後書き）

前後編です。
第一話より時間的に前の部分。
作品全体の中で、血が流れないのは多分ここくらいです。

３／１７　改行を追加。

第二話：第二世界の意の談義　―２―（前書き）

◆登場人物◆

「ク、クレーターの外どころか別の大陸から来たのよ。……北！そ、北のほう！」

――異世界の少女　アム

「いいか、辛くなったら戻ってきていいんだぞ。ここはお前の家だからな」

――機術都市ズィーベンの考古学者　ジント・フレーゲ

「その……『せーらーふく』だっけ？　おっかしいねぇ。真っ黒で死神が歩いてるみたいだよ」

――ジントの妻　イーダ・フレーゲ

「もう水はいいか？　水筒の蓋、締めとけよ。さぁて、飛ばすぜぇー！」

――ズィーベンの配達局員　ヴァン・リンデマン

第二話：第二世界の意の談義　―２―

「そうだねぇ。まずは、不動産屋に行って、住むところを見つけないとね。まぁ別に、中央公園の屋根付きベンチで野宿しても良いけど、そうそう長くはいられないよ。これから寒くなるからね」

翌朝、フレーゲ家の玄関で、イーダからふかふかした何かの入った風呂敷を手渡された。

「それは私が昔来てた服。多分合うと思うけど。キツかったらごめんね、アムが太ってるだけだよ」

私とフレーゲ夫妻の三人は、朗らかに笑った。

こうやって言葉を交わせるのも、ひとまずこれで最後である。今日から私はズィーベンの市街へ赴き、新しい生活を始めるのだ。

「その……『せーらーふく』だっけ？　おっかしいねぇ。真っ黒で死神が歩いてるみたいだよ。そっちに着替えたらいいんじゃないのかい？」

黒のトップスに赤いスカーフ、下も黒いプリーツスカート。この世界へやってきたとき――登校中の晴れ渡った朝のことである――に着用していた衣服だ。

いくら新世界に心躍っていても肌の感覚は現実世界のそれであり、唯一ヴェルティアスに持ち込んだこのセーラー服が、身を包むに最も馴染むものであることは私も否定しない。この世界の布製品にも最近は肌が順応してきたが、ちくちくという静電気が走るような特有の感覚は、長時間動く前提のこれからには不向きだろう。

「いいの。これが一番」

言ってやると、イーダは苦笑して引き下がった。続いてジントが懐から取り出した小さい紙の袋を私に渡す。

「ほら、お金だぞ。ここだと『円』じゃ物は買えないからね」

白い袋を掴んだ指先の間には、無視を許さない厚みがある。

「こんなに？　いいの？」

「あぁ、気にするな。新生活の始めにはどうしてもお金がかかるものだ」

ジントは私の両肩に手をかけた。

「いいか、辛くなったら戻ってきていいんだぞ。ここはお前の家だからな」

「うん！」

私は二人とまとめて抱擁を交わし、そして走り出した。小高い丘の上のフレーゲ家が見えなくなるまで、ずっと手を振りながら。街道を徒歩で進む、ちょっとした一人旅である。

「……」

踏み潰され、そこだけ草の萌えない街道の脇に、行き倒れの死体のようなものがある。私だ。

完全な舗装のなされていない街道は見た目以上に長く感ぜられ、また一ヶ月ほどの間、長い距離を歩くことの無かった私の筋力体力は、私の思うより落ちに落ちていた。迂闊にも道中口に運ぶ食べ物

も水も持ってきていない。
死んだか生きているかの違いだけで、境遇は力尽きた旅人と寸分違うところが無かった。

それでも余力を絞って立っているよりマシである。臥していれば体力の消耗は少なく、また通りかかった人がいれば緊急性をより高く察知してもらえるのである（実際は腹が減っているだけだが）。一石二鳥。さぁ、バイクのような駆動音が近づいてきた。
駆動音はちょうど私の側で止み、搭乗者と思しき人物が降りて脇に屈むのを感じ取った。

「お……おい、大丈夫か？」

私は顔を転がしてその人物を仰いだ。銀髪を風に揺らす長身の好青年である。

「水……」

消え入る声で要求すると、男性は僅かに狼狽してから、乗り物へ水筒を取りにいった。

「ぷはー！」

身体がスポンジに変じたかのように、水が渇きを癒していくのを感じた。水は吸収が良いようにと甘味料による控えめの甘みを加えられており、爽やかな芳香によって別の感覚器官をも満足させた。

私は男性の乗ってきた「フロートモビル」の荷台に載っていた。フロートモビルはハンドルやサドルといった基本構造は現実世界の

バイクに似ているが、タイヤが存在せず、構成術による浮力と単純な機械構造による推進力で、地面から数センチ浮遊しながら前進するけったいな乗り物である。
私は箱状の小さな荷台に腰を突っ込み、手足を投げ出して水筒の水をガブガブと容赦なく飲んでいた。

「全部飲むなよー。気持ちは分かるけどさ。ゆっくり飲んだほうが吸収されやすいんだぜ」

男は名前をヴァン・リンデマンといった。ズィーベン市街の配達局の局員で、ズィーベン市南区郊外の配達業務を担当している。
郊外での手紙の配達を終え、市街に戻るところだったらしい。せっかくだから乗っけてもらうことにしたのだった。ちなみにこの「フロートモビル」は、彼が己の構成術を活かすため、市街で販売されている機械部品を購入して製作した世界でただ一つのものらしい。

「俺の構成術では、空気の流れを操作して物体を浮かせるんだ。しょっぱい能力だけど上手く使えばこんなもんよ。嬢ちゃんの体重だって分かるぜ？　うーん、平均体重よりちょっと重いくらい？」
「余計なお世話です」

これでも「地球では」平均程度の重さなのだが。ヴェルティアスは栄養状態に問題があるのか？　そんなことを思って紛らわす。
ヴァンは性格が少々軽いのがいけない。それともヴェルティアスの今頃のパラダイムでは、レディに体重の話を持ちかけるのが特段失礼なことでもないのだろうか。それはそれで、居心地に瑕＞きず＜が付く。

「しっかし変な服着てるねー。真っ黒で縁起悪いねー。俺は仕事でズィーベンじゅう回ったことがあるけど、そんなおかしな服着た子

に会うのは初めてだぜ。もしかしてクレーターの外から来たのか？」
「これね。変って言われるの今日は二度目。私ってばクレーターの外どころか別世界から――」

と、口から爆弾を落としかけたところで、イーダの呆れに呆れた顔が脳裏を電撃的に走った。
異世界から人がやってくるなどヴェルティアスでも一般的な話ではない。いつかのジントに向けられたイーダの視線の冷ややかなこと。料理中台所に侵入した虫に対するそれを思わせる。私はまだ人でありたい。

「ク、クレーターの外どころか別の大陸から来たのよ。……北！そ、北のほう！」

ヴェルティアスの世界地図で、確か北の方に別の大陸があったはず……そう思って咄嗟に言葉を継いだ。各大陸の具体的な名称までは記憶していない。

「北っていったら、アルト大陸か？　ふーん、じゃあバーテル大陸はあまり知らないんだな」
「バ……、あっはは、そうそう、全然知らない！」

今いる大陸の名前すら、知らなかった。
ヴァンは解説する。バーテル大陸はヴェルティアスの南半球に横這う、世界最大の大陸である。大陸南西部に位置取るのがこの機術都市ズィーベンであり、その北西には港湾都市ドゥライ、東部には学園都市ゼクス、北東部には水没都市アハトなどがある。バーテル大陸からイーチェ海峡を挟んだ北にはアルト大陸が存在し、私はそこからやって来たと勘違いされているようだ。

「焦らなくても、ゆっくり覚えりゃいいって。世の中、地名と人名ほど覚えづらいものはないからな。無理しなくても、時が来ればその都度その都度解説してくれるだろうさ。街に行ったら地図を買おうぜ。名前は覚えてなくても、どこに何かあるかくらいは見て分かる方がいいだろうしよ」

言って、ヴァンは足元のペダルを一気に踏み込む。

「もう水はいいか？　水筒の蓋、締めとけよ。さぁて、飛ばすぜぇー！」

空気抵抗を除いて前進を妨げるものの無いフロートモビルは、地球のバイクの比でない高速でズィーベン市街へと猛進した。

ズィーベン市民が普段「市街」と呼ぶそこは、正式名称を「中央区」という。生活の必需品たる生鮮食料品からマイナーな趣味人のお供である機械部品まで、ありとあらゆるものが販売されるこの区には、さらには「商業区」という通称も用いられる。

人通りは頗る多く、売る側も買う側も激しい活気を呈し、ズィーベン最大の観光名所というに相応しい様相である。

「んじゃ、コイツ置いてくからな。勝手に解体すんなよー」

中央区と南区のちょうど境のあたりに、ズィーベン配達局の建物があった。

ヴァンは中で机仕事をする職員に軽く声をかけると、フロートモビルを入り口の脇に立てかけて「さぁ、行こうぜ」と私の肩をたたいた。バーテルとズィーベンをあまりに知らない私を見かね、ついてきてくれるらしい。ちなみにフロートモビルはヴァンの浮遊構成

術がなければ動かないので、特に鍵などのセキュリティは必要ないらしい。

「まずは地図だな。生活用品は基本的に環状市場の東側にあるんだぜ」

環状市場とは、商業区の中心から同心円状に幾通りもある市場のことだそうだ。人々の生活領域たるクレーターが円形であるように、人々が集まる市場の通りも複数の円から成っている。

東側では生活用品や機械部品、本などの工業製品が主に販売されている。これは東区に工場地帯があるためで、少しでも流通の手間と費用を省こうというズィーベン商工協会の考えによるものである。

適当に近くの書店に入り、地図コーナーを探す。本というメディアの形態は地球におけるそれと大差がなく、従って書店を物色するのも現実世界における要領をもってすれば事の足りることだった。ただ一つ困難があるとすれば、

「おいおい、無茶苦茶な高さだぜ」

まさに聳えるという表現こそ正しい、本棚の異様な段数である。十メートル超の天井まで届く数十段の本棚に、ほとんど隙間なくびっしりと書籍が詰め込まれている。

「ヴァンさん、本読まないんですか？」

この書店はズィーベンでは最大手だという。市民なら誰しも一度は入ったことがあり、誰もがその冊数に圧倒されるか知識欲を存分に満たして出るという、誇張が誇張になりきらないような評判を押される一種の名物だ。

二十代も前半から中ごろに差しかかろうとしているヴァンが、まるで一度も入ったことがないような反応をするのは、彼自身の話と一致しない。

「本読むくらいなら、『アイツ』とひとっ走りするぜ」

私は黙して地図を探した。

やがて探しあぐねていると、妙に手足の長い店員が近づいてきて、「何をお探しですか」と現実も異世界も無いフレーズで尋ねてくる。ヴァンが応じた。

「地図が欲しいんだ。おいアム、世界地図か？　それともバーテルの大陸地図？」

「夢はでっかく！」

「世界地図だってよ」

店員は「了解しました」と事務的に告げると、いったん棚の天井近いところを見上げ、何やら確認を終えたようにしてから本棚に手をかけた。かけたというより、「当てた」のほうが近いように思われる。

何が始まるのかと二人は身を構えた。書店の中だというのにそれは間違った判断ではなかったのである。

店員は手を棚に吸着させながらロッククライミングでもするように本棚を登りはじめ、ほとんど最上段の棚から目当ての地図を引き抜いて、またビデオを逆再生するように地上へ戻ってきた。その動きの俊敏さたるやどこかの招かれざる虫を思わせる。

店員は何事も無かったようにヴァンに地図を手渡し、「また御用があればお申し付けください」と恭しく言って別の棚の間へと消え

て行った。あれが彼の持っている構成術の力なのだろう……と、私は後に考えた。

「……勘定しようぜ」

茫然としていては敗北感で心が湿潤しそうだったので、私は早々とレジに向かった。

「金、ちゃんと持ってんのか？　まぁ、地図の一枚くらいなら俺が払わないでもないけどよ」

と、ヴァンに言われはしたが、ここで奢られていては独立して生活したことにはならない。ジントからヴェルティアスのお金をもらったのだ。ここで使わずしてどうするかという思いがあった。

懐から例の紙の袋を取り出し、札をつまんで数えてみる。ヴァンはその様子を見て顔を青くしたようだった。

「うおっ、俺の月給より持ってるじゃねーか！」

全て数えてみると、札は三十枚あった。ヴァンが唸る。

「三十万ジェノームか。俺もまだまだだな」

ジェノームとはヴェルティアス全土の通貨である。補助単位は無く、一ジェノームは約一円の価値と考えていいようだ。ちなみにヴァンの給与は月あたり十七万五千ジェノームだそうだが、だからどうということもない。

「はい、一千ジェノームね」

さっきとは別の、レジの店員が釣りを寄越した。買い物の感覚は、現実世界とあまり変わりがない。退屈といえば、退屈である。

腹が減ったと伝えると、ヴァンは安くて美味いという行きつけの店を紹介した。

商業区の真ん中、ズィーベン中央公園に出ているファーストフード・スタンドで、「ホロホロ」という青白い獣の肉を、表面が軽く焦げるまで焼いた粉物の生地で葉物と一緒に包んだ、地球で言えば「トルティーヤ」のような料理を販売している。

気に召すかどうか分からないからという理由で、ヴァンは私の分までを彼のお金で購入した。中央公園のベンチに座り、かぶりつく。

「美味しいー！　柔らかーい！」

頬張りながらそう評した。気張って噛まずとも口の中で崩れる柔らかい肉の感触がたまらなく美味だった。

「言った通りだろ？　これで一個あたり百八十五ジェノームだってんだからお得感バリバリだぜ。でもいくら美味いからってホロホロの肉は食い過ぎちゃいけないぞ。胃に穴が開くらしいからな」

ホロホロという動物の肉には始めから縦横無尽の傷が入っており、これが独特の触感に大きく寄与しているそうだ。いつかフレーゲ家の朝食で食べたのもこの肉だった。

ホロホロはもともと希少な生き物で、昔は金持ちの口にしか入らない高級食材だったそうだが、一年ほど前から大陸中央北部のエルフ市周辺を中心に爆発的に数が増え、生態系の保護を目的として狩猟が推薦されたこともあり、広く一般に出回るようになったのだという。

獣肉は他の生物と明らかに異なる青色をしており、その見てくれのどギツさに違わず、成分的に消火器への刺激が強いようである。

「何があったのかは知らねーが、こういうのが俺みたいな中流階級でも、簡単に食えるようになったのはいいこったな」

言ってヴァンはバクバクとそれを口に放り込んでいった。

「……？」

私は視線を感じていた。

中央公園はズィーベン商工協会の建物に隣接している。環状市場で取引を終えた商人や、北、南区から生活のための食材や用品を買いに来た主婦たちが、この公園をひとまず休憩する場として利用している。

しかしそればかりでもないようなのだ。あちこちに点在する屋根付きベンチには、綺麗といえば世事にしか聞こえるまじき衣服を着た少年少女が中におり、一番近いベンチからは少年が身を乗り出して私を凝視していたのだった。

正確には私自身ではなく、手に持った食べ物である。思わず私はそれと少年とを交互に見比べて、おおよその事情を察した。「行動」に移すべきか、移さざるべきか。

「やめとけよ」

ヴァンが制する。

「情けなんかかけたって、何の足しにもなりゃしない。そいつをあげたら奴らの腹が永遠に満たされるわけじゃないし、奴らの生活が

軌道に乗るわけでもないんだ」

それは商業の発達した都市ズィーベンの、負の側面だった。

商業という生業＞なりわい＜は、当たりとはずれ、成功と失敗が雲と泥ほどの違いを孕んで分かたれている。一度契機を得た者は指数関数曲線をなぞるように財を膨らませ、そうでない者はいつ脱するかも知れない泥沼に足を取られる。彼らはその泥沼から生まれ、同じく泥の海を泳いでいるのだ。

「貧富の差がデカいんだよ。俺みたいに堅実にやるならともかく、少し夢を見ればたいてい吸い取られる世界だぜ」

クシャクシャと、ヴァンが包み紙を潰す音がした。

「さっさと食っちまえって。ある程度までなら、自己中心的でもカミサマは許してくれるさ」

私はいたたまれなくなり、ベンチから立ち上がった。「歩きながら食べるよ」と宣言すると、ヴァンも肩をすくめて私に倣った。

再び環状市場の東側を歩く。生活のためには衣食の他に「住」が必要である。イーダには中央公園で野宿も数泊程度ならば頭ごなしに否定するものでないとは言われていたが、あの状態を見てなおやってみる気にはなれなかった。不動産屋は東区との境あたりにあるというので、市場を眺めつつゆっくり向かうことにした。

「気になってたんだけど、『機術』ってなに？」

ズィーベンは「機術都市」と呼ばれる。「機術」はヴァンの話や

道端の看板に表れるヴェルティア語――つまり現地の言葉を、自分なりに日本語に訳してみたものである。
訊いてみると、一度ヴァンは目を丸くしたが、やがて一人ふんふんと納得したようにして言う。

「あぁ、そっかそっかー。アルトじゃ機械は使ってないんだもんな」

一応アルト大陸人扱いとなっている私は、「う、うん、そうそう、見かけないんだよねー」と適当に濁した。

「一言でいうとカラクリだな。普通は構成術でないと出来ないような複雑なことを、金属部品を組み合わせた一連の仕組みで再現しちまうカラクリだ。時間測ったり、遠くに声を送ったり、それを受信したり。俺の『アイツ』だって機術だぜ。推進装置だけだけどな。さすがにあの鉄のカタマリを浮かすのは機術じゃまだ無理っぽいぜ」

要するに地球における機械と同じような仕組みと扱いだ。違うのは、機械のようなことを、一部でもヒトが生身で出来るかどうか、という一点のみである。

「ほーら、そこの店で部品売ってるだろ？　――おう、オヤジ、あの部品、軽くて良かったぜ。まーたスピード上がっちまった」

途中に見つけた機術部品店の主人とは顔見知りのようである。空中で滑走するおかしなマシンを駆るスピード狂として、ヴァンはズィーベンの機術マニアの間では有名らしい。ヴァンは「仕事の効率のためだぜ」と主張したが、プライベートでも同等かそれ以上に乗り回しているのは性格から明らかだ。

市場の通りを蛇行し、あっちで売り物に食いつき、こっちで文化に心奪われながら、二人はやっと目当ての不動産屋へ辿り着いた。

不動産屋の社長は、口ひげを蓄えた小太りの中年男性である。ヴァンが「部屋借りたいんだけど」と伝えると、その男は奥の書庫から一冊の分厚いフォルダーを取り出してきて、二人の前で広げた。

二百は下らない数のページ一つ一つには、物件の平面見取り図と、水道などの基本設備の仕様を書き連ねた表が載っている。各ページ右下には、極端に細かいバーコードのような長方形の記号が印刷されていたが、これが何なのかは社長のみぞ知るといったところだろう。

「詳しく見たい物件がありましたら、お申し付けください」

それだけ言って、社長は脇のデスクで書類仕事に取り掛かった。

ズィーベン市では中央区を囲む四区のうち、北区と南区が主に人々の居住する区域となっている。

このうち、北区には商業などで成功を収めた富裕層が多く住まい、南区にはそれ以外の仕事で地道に稼ぎを得る中流階級の住居が屋根を連ねる。フォルダーにファイリングされた物件のほとんどは、住所欄に「南区中央側」という文字が収まっていた。ちなみに西区には十数年前まで大規模な集合住宅があったものの、入居者の至大な不足から採算に著しい問題が生じ、管理会社が撤退して現在は取り壊しすらされず放置されているということだ。

「う～ん、長く付き合うものだから、慎重に選ばないとな。とりあえず水道は機術式のほうがいいぜ？　いちいち井戸で地下水汲み上げんのは面倒くさいしな。階は一階で決まりだな。お前うるさそうだし。風呂はズィーベンじゃだいたい公衆浴場だ。ついてなくても気にするこたぁねーな。一番大事なのは職場との距離だぜ。近いと

遠いとじゃ朝時間の余裕が――ってお前、そういや仕事どうする気なんだ？」

仕事……金銭を獲得するための一般的で堅実なほぼ唯一の手段であり、国家憲法的には国民の義務――と、ここでは、その限りでないもかも知れないが。しかし何かしら得ておかなくては、先が罔くらくいのは火を見るより明らかである。

「あははっ、何も考えてなかった……どうしよう！」

半ば泣きつくようなモーションにヴァンは困惑した。

「ま、まぁ、それも含めてゆっくり考えようぜ。おおかた南区の中央側になるんだろうから、どこを選んだってさして変わんねーよ。それに仕事なんて一朝一夕で決まるもんじゃないし、ここで契約したからってすぐ入居できるわけでもないんだ。それまでは俺ん家に泊めてやるからよ」

「それはそれで、よろしくない香りが……」

流し目でボソッと呟くと、ヴァンは誤解するな、あくまで良心で、俺はお前みたいなガキに興味は、などと目に見えて狼狽し反論を並べ立てたが、それを横目に私は良さげな物件を探し出して、そのページにぴんと立てた人差し指を白羽の矢さながらに突き立てた。

「これ！　これでいいよ！」

選んだ物件は月額二万四千ジェノームという格安の平屋集合住宅で、水道は井戸の手動方式、風呂は付かず、間取りは五畳強ほどの狭小さという、良くも悪くも価格の程を知ったものだった。立地は中央区と南区の境界よりそれほど遠くなく、商業区内で何らかの職

を得るつもりならばまずまずといったところである。

どこでも大差ないのなら、さっさと住処だけでも決めてしまって次へ進みたいというのが私の本音だった。ヴァンは私の肩越しにフォルダーを覗き込んで、目を奇妙にグルグルと回しながら「ん～」と唸り、しばらくして「俺の部屋とあんまり変わんね」と、何もこちらの得にならない情報を垂れ流した。

「ほう、これですか。設備が今の水準に満たないというので、誰も借りる気配が無かったのですがね」

言い、社長はページ右下のバーコードに右手の指を滑らせた。そして十秒ほどその指を頭に当てながら眉間に皺を寄せて集中する。クイズ番組を観ながら答えを先に思いついた時のように社長の顔がパッと明るくなると、彼は右の手の平を上にして空中にかざした。

「わーっ！」

手の平の上に、私が選んだ部屋の立体模型が現れた。緑色の光の線で構成されたそれは、サイエンス・フィクションで頻繁に目にするホログラムのようである。社長は私の目の前でその手を左右上下に動かしてみせ、部屋の中の様子を確認させた。

「私の構成術です。空間に立体を投射することができます。この能力を活かすために、私はこんな仕事を始めました」

それはまさに適材適所の体現である。直接物件を見に行かずして、客にその立体像を伝える。私は自＞おの＜ずから感嘆の声を漏らし、ヴァンは「お見事」と短くも端的な一言でその能力を評した。

「どうです？　お客様の希望に召さないようでしたら、また別の物件をお探しになってください。気に入られたようなら、契約に入りましょう」

私は拍手しながら大きく首肯した。社長は「ふっ」と気合を込めて手の平に建つ部屋のミニチュアを消し去り、奥の書庫から今度は契約書を持ち出してきた。

「名前、年齢、所属など、様々書いていただくところはございますが、まずは『構成術刻印』を済ませてしまいましょう」

社長は、契約書の紙束の中からうっすらと輝く一枚の紙を取り出した。

「ふぇ？」

聞き慣れない言葉だ。私が異世界人だからという要因からではなく、これまでにヴェルティアスの文化を学び足りなかったからという、知識の不行き届きによるものである。冷汗であらゆる体表を湿らせながら、私は振り返ってヴァンを見た。

「ん？　アルトではこういう本人確認はしないのか？」

ヴァンは説明した。

「構成術」の能力の詳細は、個人によってかなりの差異が存在する。空気を少しばかり操るような（ヴァン曰く）些末な能力から、触ったものを瞬間的に爆砕するようなヴァイオレンスなものまで、そのバリエーションは極端というまでに広い。また、先天的に素養がない分野の能力は、いくら鍛錬しても身につくことはない。

この独自性を本人確認に利用したシステムが「構成術刻印」であ

る。それぞれの能力に対応した描き直しの利かない「刻印」と呼ばれる術式の設計図を、特殊加工された専用の紙面に刻みつけて己の証とするのだという。

ヴェルティアスの人間は誰しも何かしらの能力を宿して生を受けるため、これは他のいかなる手段も比肩すべからぬ絶対的確実さをもったシステムである。能力がどんなに弱い者にでも、「刻印」は必ず存在するからだ。

が、

「私は……無力……」

地球人の私がそんなことを出来ようはずもない。

「『ハンコ』じゃだめ？　ハンコ！」

「……ハンコと申しますと？」

「わたし的にはそれが『刻印』なのよね」

「理解しかねますな」

世界が違えば「ハンコ」も違う。「サイン」についても同様の便宜が図れないか尋ねてみたが、やはり鏡面に光を放ったように撥ね返された。八方塞がりと知った私はそれ以上粘るのを避け、すごすごと不動産店舗から退き下がった。

第二話：第二世界の意の談義　―２―（後書き）

異世界の生活とか常識とか、そういうところがよく出るように書いてみました。
仄かに笑えるような場面もちらほらと。このあたりでしか出来なそうですから。
読んでて楽しいと思ってもらえればとりあえず成功です。

ちなみにメタ的な発言が一か所だけあります。良ければ探してみてください。
第二話は三部目まで。前回は前後編と書きましたが収まりませんでした。

３／１７　改行を追加。

第二話：第二世界の意の談義　―３―（前書き）

◆登場人物◆

「あ、そういえば、『殺人鬼』って何なの？」

――異世界の少女　アム

「美味しくても高いと買えないの！　当たり前のことじゃねーか！」

――ズィーベンの配達局員　ヴァン・リンデマン

「あっれー、何その子！　ヴァンってもしかして年下に興味あるの？」

――環状市場青果店の店主　ホゥ・ポアソン

第二話：第二世界の意の談義　―３―

時はそろそろ「夕刻」と呼ばれる頃を迎えていた。この世界の太陽＞ソル＜は橙色に燃え上がりながら山の端へとその身を潜らせはじめ、ズィーベンの東側環状市場は色調をほんのりと赤らめて昼とは異なる趣を呈している。

揺れるポニーテールと、とぼとぼと両手を前に投げて歩く姿が、この刻限には逆にさまである。ヴァンは情けなさそうに笑いながら、私の肩に手をかけて横に添いつつ歩いた。

「気にすんなってー。『保険』はかけておいただろ？　西側で美味いもんでも見つけて、俺ん家でパァッと食おうぜパァッと！」

保険というのは、入居可能になるまでヴァンの家に泊めてもらうという例の一方的約束のことだが、私はどうしても気が進まなかった。「キケンな香り」とは半分以上冗談で口走ったものに過ぎないが、構成術刻印の問題は異世界人たる私に解決の手立てがなく、また、ヴァンの家にずるずると居候などするようになったら、それはフレーゲ家の二の舞に他ならない。

これもイーダの半ばは冗談だが、中央公園に野宿してみるというのも選択肢に入らないわけではない。しかしあの子供たちのことを想うと心が締め付けられるようで、長くあの場にいられる自信はなかった。気候的にもそうだ。ヴェルティアスには四季があり、一月＞ひとつき＜もすれば足元に積もる落葉は雪に変わるだろう。

「駄目なのかな……私……」

弱音が咽喉を押し広げて出る。あらゆる策という策が超硬度の壁に阻まれた。生きることとは、斯くも困難なのか。

「アム、お前、帰るところは無いのか？」

ヴァンが私の背丈に目線を合わせる。私は顔を伏せたまま、視線だけを彼に向けた。

「俺にはあるぜ。南区のクレーターリム添いにボロい実家があって、そこで親父とおふくろが待ってる。出稼ぎってほど遠くもないけど、俺は自立したいから中央側に家借りて一人暮らししてんだ。大概の事は自力でどうにかなるが、どうやっても駄目なことがあれば、フロートモビルを飛ばして会いに行くぜ。自立ってのは身の回りの全てを自力でやっちまうことじゃない。必要だと思った時には他人の手を借りるんだ。そのために社会的な繋がりを作ったり、他人をよく知ったり、逆に手を貸したり、様々なことを覚えていかなきゃならない。だからいきなり自立することもできない。ガキと大人の境目は大山みたいなもんだ。越えるのに挫折することもあるし、ひとっ飛びにもなりゃしねぇよ。だから、一度戻ってみてもいいんじゃないのか？」

一瞬だけ、滴を落として水面が波打つように、心に甘えと妥協の揺らぎが生じた。しかし頭をふるふると振って、心をより激しく揺さぶって、そんな憑き物を払い落とす。

フレーゲ家に再び世話になること、それは前途への展望の乏しい者にとっては、最も楽になれる選択肢と考えられるだろう。しかし私はそこまで愚かであるつもりはない。フレーゲ家は私など置いておけばいずれ金銭的に困窮し、私は今後、刻印に必要な構成術を得られる機会を持つわけでもない。

この問題ばかりは時による解決のしようがないのだ。ゆえに解決を待つ間の拠り所としてフレーゲ家を考慮に入れるのは根本的な誤りである。

いつか私の感じた不安が、具象化して眼前に出現したといえる。私だけが、この世界で異質。私は「ヴェルティアス」で生きられない。なぜかといえば、単純、私は異質だからだ。郷に入っては郷に従えと昔の地球人は説いたという。しかし習慣的な領域で自らの行動と認識を矯正せよというこの諺の範疇を、この私とヴェルティアスの相性はあまりにも大きく逸脱している。

ならばどうしたものか。

むざむざヴェルティアスで客死する気はさらさらない。生理的な生存本能と、底知れぬ好奇心とが、それを許すはずもなかった。是正が及ばぬ異常さは、そのままにして生きるしかないのではないか……。そんな結論が関の山のようでもある。具体的にどうするかまでは、思いついたら苦労はしない。

いつの間にか、立ちどまっていた。ヴァンは私の三歩ほど前で、背を向けたまま待ってくれている。

「とりあえず歩くぞ。無理っぽかったら、俺がおぶってやってもいいぜ。お前はまだまだ、世の中を知らないんだ」

彼は振り返った。山に半分以上を埋＞うず＜めた太陽が後光の如く差し、ヴァン・リンデマンの影が紅蓮の色合いの中に飲み込まれる。

「バーテルにやってきてばっかで、酷かもしれないけどよ。歩かなきゃさ、何も見られないんだって。前に進んで、色んな人に出会え

よ。別に、将来的に頼ることが前提じゃなくたっていい。世界にはどんな人々がいるのか、それを知るだけでもいい。手っ取り早くて、楽しいんじゃないか？　机に座ってガリガリ勉強してるよりもさ。お前、そういうの好きそうだもんな。ほらよ」

ヴァンは数歩下がって私の前で腰を屈めた。私は――気恥しくはあったが、彼の背中に体重を乗せた。

肩から彼の体の前面に手を回すと、ヴァンは私の両脚に手をかけ、体全体を持ち上げた。

「お尻触らないでよ。やったら暴れるからね」

「んなことするかっての」

迂闊……そうだ、迂闊だったと思う。大海のように溢れる好奇心を、何故冒険心に変えられなかったのか。ひとところに留まって毎日同じことをしていたのでは、地球にいた頃の退屈な暮らしをエミュレートするだけではないか。

世界地図はこの手元にある。ズィーベンに拘らず、私はどこへなりと行って構わないのだ。金が尽きたら野に生える草でも食めばいい。川を見つけて喉を潤せばいい。ヴァンの言ったことも達成できる。簡単なことだ。そう、簡単なこと……。

「西側はな、新鮮な食い物がたくさん売られてるんだぜ。なんたってドゥライの港に近いからな。魚とか、肉とか、野菜とか、何でもありだ。美味そうなもん見つけたら遠慮せずに言ってみろ。……値段次第では買って二人で食おうぜ」

ズィーベンでは既に様々な人に出会ってきた。ジント、イーダの考古学者夫妻、本屋の妙な店員、不動産屋の社長、そしてヴァン。こんなのは地球では出来なかった体験だ。

もっと世界を拡げよう。近いうちにズィーベンを出て、地図に従って他の町に行くんだ。

「お前、やっぱりちょっと重いな。――うごっ！」

背中の上で私は最大限仰け反り、反動を乗せて特大の頭突きを喰らわせた。

ズィーベン市中央区、中央公園を何度もぐるりと取り囲む環状市場の西側では、東との雰囲気の違いが肌で感ぜられるような、ものものしい緊張が漂っていた。

深緑色の厚手の上下を纏い、肩、肘、膝、帽子などの数か所に紅く光る直径六センチほどの宝石に似た何かを装着した、ただならぬ様子の屈強な人間がそこここをうろうろしていたからである。

「こいつらは……連合の国家警備軍じゃねーか。それもあの紅いのは多目的機術ギアだ。ってことは、ありゃ最新鋭の機術特化部隊だな。なんでこんなところに……」

軍隊！　無いと思った根拠もないが、社会システムの一部として失念していたことは確かだ。

軍隊というのは二つの面から生々しい。専ら血を流すために存在し、欲しくなくても持たなければ国を侵される。私の国は形式として軍隊というものを持たなかった。しかしそれゆえに国民は軍隊を持つ国と同じかそれ以上に力の在り方を考え、また悩まされてきた。

ヴェルティアスという異世界――そこに求めたのは狭い目では私自身の解放だが、広く見ればそういった生々しい事項からの脱却もあったのかもしれない。

「国家……警備軍？　最新鋭って？」

「なに言ってんだ。アルト人だってそのくらい知ってんだろ」
ヴァンが脚のばねで私の体を浮かせ、しっかりと背負い直した。
「わ、私、社会科が苦手なんだ！」
「……常識だぜ、覚えとけよ！」
フレーゲ夫妻からこの世界のことは様々教えてもらっていたが、軍隊についてはからっきしだった。ヴェルティアスの生活に関して赤子同然だった私だから、軍隊や治安組織のことが二の次となってしまうのは致し方ないと思う。
異世界生活第二の師、ヴァンによる社会科講釈が開始された。
ヴェルティアスの四大陸四国による世界連合国は、志願制の「国家警備軍」という軍隊を持つ。軍隊といっても世界国家に外敵は存在しないため、国内での治安維持や警察業務が主な活動となり、犯罪の取り締まり、暴力的示威活動の鎮圧、連合四国の相互監視などを行っている。
通常部隊の他には、構成術や機術の特別な訓練を行った「特化部隊」と呼ばれる精鋭の組織が存在するが、これは大規模な暴動や国家単位での造反が勃発した場合に備えてのものであり、これといった報道もされていないのに市街に配置されているのは異常事態であるらしい。
「と、いうわけだから、ちょっとばかし訊いてみようぜ。――おい、そこの兵隊さんよ」
ヴァンが最寄りの軍服を呼ぶ。長身の兵士は想像通りというか、鬱陶しそうな素振りをしてから彼に応じた。

「どうして警備軍が街中に出てる？　何かあったのか？」
「答えられん。市民の動揺は避けねばならない」

地響きを思わせる低く野太い声に、ヴァンは怯まなかった。私は彼の頭の上から手を振って愛想を振りまいてみる。

「お前らがうろついてたら、それだけで市民は怪しがるぜ？　『市民のための軍』ってのは、物騒なもん身に着けて口を一文字に結んで街中を闊歩する奴らのことなのか？　大丈夫だって、俺の口は紫鉄鉱より硬いんだ。俺に明かせば俺とコイツから外に拡がることはねぇよ」

軍隊のあらざるべき一面を説かれて兵士は頭に血が上りかけたが、やがて、ゆめゆめ口外せぬようとの条件の上で、理解を示して状況の説明に入った。ちなみに「紫鉄鉱」とは、強度と靭性に優れヴェルティアスで最も価値が高いといわれる金属の鉱石のことである。

「『殺人鬼』の目撃情報があった」

兵士の放った衝撃的な単語が、頭蓋骨の内側を反響するのが分かった。

「西区の中央側らしい。我々は奴を捕らえるため、西区から中央区西側にかけて警戒態勢を敷いている。お前らは随分と物好きなようだが……くれぐれも近づくなよ。晩飯の材料を買ったら早めに家に帰ることだな。ただでさえ、西区には寄る価値が無いんだから」

一通り言い終えると、仕事の邪魔だからと手で払うように退けられた。一応言うことは言わせたので、これ以上突っ込むのは不義理と考えてヴァンも引き下がる。しかし再び環状市場の生鮮食品市場

を歩き始めると、ヴァンは兵隊の市民を無意識的に軽んじるような物の言い方をあれこれと愚痴っていた。
惣菜屋の美味そうな匂いが漂ってきて、気の緩んだ私が欠伸をすると、はたと申し訳なさそうに彼は憤懣漏らす口を諌めた。

「あ、そういえば、『殺人鬼』って何なの？」

眠気が意識に浸み渡る前に、私は気になっていた語句を口に出して尋ねてみた。共感覚というものだろうか、ただの聴覚情報に対して、血赤色が席巻する情景と酸化鉄の独特な臭いが自ずと浮かぶ。

「お前な……いや、もういい」

始まりは半年ほど前のことだった。

バーテル大陸からアンゼック大海を挟んだ南のエイル大陸で、とある少数民族が皆殺しにされた。
彼らは古来から何かにつけて排斥の憂き目に遭ってきた民族で、移住しては追われ、移住しては追われを歴史の中で気の遠くなるほど繰り返してきた。厳寒にして未開の地エイルに辿り着いてからはそれまで大陸内に留まっていたが、三百年ほど前の一部のバーテル人によるエイルへの集団移住によってその生活領域は著しく狭められ、沿岸部の氷の断崖に横穴式の住居を構築して、食料が少なく外部との連絡が取れない過酷な環境で生きることを余儀なくされていた。
長い迫害のうちに人口は摩耗し、最近、連合国の人口調査委員会が調査に踏み込んだときには、「殺人鬼」による虐殺で全員が死亡しており、寒冷な気候で腐らずにいたその骸の数は二十を下回っていたという。

「殺人鬼」の活動はエイル大陸だけで完結しない。世界中、アハトとエルフを除いた全都市で少なくとも一人が彼によって殺害され、死者の総数は百人を悠に超える。

何故それらが「殺人鬼」の犯行だと分かるのか？　彼の後塵には明確な特徴が残されているからだ。

まず被害者の層が「社会的弱者」と呼ばれる人々であること。病人、貧困層、障害者、少数民族……その他もろもろの、社会的に少数で、発言力や影響力に劣る人々が凶刃にかかっている。

また、遺体が全て首を斬り落とされていること。前述の被迫害民族も、御丁寧に全ての屍が首の中ごろで分かたれていた。そのことに意味があるのかどうかは不明だ。

そして、目撃情報が圧倒的に多いこと。これは「殺人鬼」関連全体としてでなく、殺人一件あたりの情報量である。ボロ切れのマントに穴だらけの上下という目立った外見をしており、その行動も「隠れる」ということを知らないかのように衆目を避けない。これは国家警察軍に対する挑発とも考えられているが、やはり真相は闇に包まれている。

私は思わずヴァンの両肩に手を突き、顔を覗き込むようにして叫んだ。

「百人以上死んでるのに、まだ捕まえられてないっていうの！？」

耳元の大声と、突然肩に食い込んだ指に驚いて彼は呻いた。「あ、ごめん」と私は小さく呟いて、すごすごと負担にならない姿勢に体を戻す。

現実世界とヴェルティアス、平均体重は違えど命の重さは同じだった。警察権力の体たらくに抱く憤怒の程にも、紙一枚の厚さを超える差は感じていない。ヴェルティアスは、私が大地を踏みしめる二つ目の世界だ。

「そんなことは言うけどよ、その『殺人鬼』ってのは、練達した凄腕の剣術と反則じみた構成術を扱うって話だ。今までも何度か警備軍が会敵したことがあるらしいが、尽くいなされて終わったんだとよ。詰めるまではいいが、いつも力で突破されるんだ。――奴らにとっては、あまり表に出したくない情報みたいだけどな」

つまり警備軍が努力を怠っているのではなく、「殺人鬼」が強すぎるということ。強大な力が、誤った方向にその矛先を向けている。

正しく扱えばこの世界にとって如何ほどの利になったか知れない。私はやりきれない気持ちになった。

「立場の弱い人ばかりが殺される……」

「そう、それも百人以上だ。偶然なんかじゃない、意図的にやってんだろうよ。何が目的なのかはさっぱり分からねぇけど」

殺していい人間などいないのは無論だが、単純に人を殺す以上に市民の反感を買うであろうその行動の意味は、ヴァンの言う通り推し量れない。事実だけを直視すると、心の底から沸々と義憤が噴き上がる。

が、同時に自分でも不謹慎と感じるもう一つの感情が芽生えていたのは否定できなかった。単身、剣術と構成術を操り警備軍の包囲を切り抜けるその「殺人鬼」がどんなものか、見てみたいと思う気持ちには嘘がつけない。百人の首を刎ねた剣でも、私の好奇心までは斬り払えないようだ。

「……っと、まぁ、陰鬱な話はこのくらいでやめにしようぜ。いま俺達が心配したってしょうがない。いくら『殺人鬼』でも辻斬りまではしねぇよ。俺達は俺達で、さっさと買い物してさっさと帰って

パァッとやろうぜ」

私はこの時、頭の片隅に「殺人鬼」への興味を飼わせたのだった。

太陽は上っ面だけを残してその巨体のほとんどをクレーターリムの陰へと沈めた。

しかしズィーベンの環状市場は依然活気を翳らすことがない。むしろこれからが本番と言わんばかりに、人を呼ぶ手がその動きを逞しくしている。ヴァンがそろそろ疲れたといって一旦降りるように言ったので、私はそこから彼と手をつないで歩くことにした。

「おーい、ヴァンー！　見ていきなさいよ！」

市場の奥の方からこちらに手を振っている一人の女性がいる。年齢はヴァンと同じくらい、三角巾を着けた八百屋の店員である。

ヴァンは額に手を当てて「あぁ～」と嘆息を漏らしたが、無視して踵を翻すわけにもいかないので仕方なしに寄っていった。

「嫌そうな顔すんじゃないわよ！　――あっれー、何その子！　ヴァンってもしかして年下に興味あるの？」

「そういうこと言われたくないから嫌な顔したんだけどよ」

ホゥ・ポアソンはヴァンの中等学校時代の同級生である。群青色のストレートヘアを三角巾の後ろに流し、いたずらっぽい雰囲気の瞳には明るい黄色が宿る、気さくな女性だった。

一度始まったヴァンへのからかいは私の存在を忘れて続いたため、時間をもて余した私は青果店に並んだヴェルティアスの野菜を眺めていた。

「……ん？」

最前列に、二枚貝のような形状をした緑色の食品が置かれていた。とても野菜のようには見えないその食品の直径は三十センチほどで、開いた部分には粘性のある透明な液体がまとわりついている。

どうにも気になってしようがなかったのでしばらく見つめていると、私はその野菜についてあることに気が付いた。

「動いてる……」

二枚貝のような上下は、言うなれば人の口のように開いたり閉じたりを繰り返していた。外縁部には上下それぞれに高さ一センチ程度の鋭利な棘が立ち並び、口が閉じると噛み合ってさながら歯のようである。

「それでヴァンったら薬草学の実地授業で川に落っこっちゃってさ――」

「何度目だよその話……あぁ、もう、耳にタコが何匹も――」

「あはは、バーカ、タコは『杯』で数えるんだよ。ていうかそもそも耳タコの『タコ』って食べ物のことじゃ――」

あまりにもくだらないタコ談義をよそに、「それ」は大きな口を開いた。まとわりつく粘液が透明な糸となり、棘と棘を結んで監獄の鉄格子になる。人で言うところの喉の奥深くは、夕の光量では照らし出すに足りなかった。

ふと、

強烈な衝動が、中枢から末端まで私の神経を駆け巡る。

開いている、口が。疼いている、指が。

ならば、することはただ一つ。迸る好奇心にこの身を乗せ、波濤の最高点から飛び出そう。

「やーっ！」

自らを鼓舞する声を上げ、二枚貝のその間へ、左手の人差し指を盛大に突き刺した。指先が内側の粘膜と思しき場所に触れる。

その瞬間、指を巻き込んで上下の口唇ががっちりと結ばれ、いくつもの棘が獲物を逃がすまいと噛み合った。

「うわぁぁぁぁー！」

棘が指を外していたため痛くはなかったが、奥から分泌された粘液が纏わりついて不快なことこの上なかった。思わず私は指を咥えられたままその野菜を振り回し、どうにか引き離そうとした。道を歩く人々が私の大声を訝しんで振り向き、そして店の主ホゥもヴァンとの言い合いを中断して異常事態に気付いた。

「あ、ちょっと、何やってるの！」

売り物をぞんざいに扱われたホゥが、私の腕をヴァンに押さえさせて「それ」を回収しようとする。口の上下を素手で掴み、こじ開けるという至ってシンプルな方法である。

「その野菜」の噛む力は頑なで、中学の頃の学級では腕力において右に出るものがいなかったという彼女でも、指が抜ける隙間をつくるのに約一分を要した。

「野菜」が観念したように私を解放し、ホゥがふぅと溜息をつく。と、そこに、

「――おい、お前っ」

一人の卑賤な身なりをした少年が突然現れ、店先の野菜を一掴み盗んで走り去っていった。少年は恐るべき素早さで市場の店々の間を駆け抜け、西区の放棄住宅街へと姿を消した。

「と、逃げられたか……」

ヴァンが悔しそうに地団駄を踏む。私はほんの刹那の出来事を理解できず、呆然としていた。

「えっ？　なに？」

ホゥは片手を腰に当て、もう片手で顔を覆い、うんざりしたように声を絞り出す。

「あー、もう、またあいつらか！　西区のスラム街の子供だよ。市場で隙あらば食べ物を盗んでいくの。はぁ……あなたに気を取られて隙を与えちゃった」

辿っていくと原因が私に行きあたるのを悟って、私は慌ててごめんなさいと詫びを入れた。

ホゥは盗まれた陳列物を確認し、少年の突進でずれた棚を直してから、いいよいいよとやんわり私を許す。

「盗まれたのは『扁平ネギ』だね。あいつら焦ってとんでもないもの掴まされたみたい。あれは加熱調理もせずにガリガリ食うにはキツすぎるよ」

そう言って、売り物をくすねられたにも関わらず、意地悪そうに笑った。ちなみに店頭に並んでいた「扁平ネギ」は、現実世界での玉ネギを上からぺったり押し潰したような形をしていた。ホゥの話

を聞く限り、この野菜の風味は玉ネギのそれと相違ないようで、生で丸ごと食べるには厳しいものがあるようだ。ホゥという人物がどういうものを腹に持っているか、少しだけ分かったような気がした。

「ん～？　これ、まさか『食人草』か？」

植物の分際で私の指を食らった「野菜」の首根っこを摘み上げて、ヴァンは珍妙そうにそれを見る。

「そ、よく分かったね。川に落ちてまで『薬草学』受けた甲斐があったね」

ホゥがからかうと、ヴァンはフッと口の端に笑みを浮かべ、脈絡も無く誇らしげに返す。

「この見た目のインパクト、覚えてないほうがどうかしてるぜ」

「食人草」は実際に人を食うわけではないが、小型の哺乳類や鳥類、昆虫を処理できるような消化器官をもつ植物である。人間が食われないのは単純にサイズだけの問題であり、またその見た目が空前絶後のおぞましさであることからこの名が付いたという。

餌となる動物の組織をそれほど細かく分解せず吸収するため、食人草の食感や味には肉の片鱗があり、栄養価も動物性食品に近い。病気で体が衰弱している時に動物性の栄養素を摂りたい場合はよく食人草が食され、それゆえに一種の薬草として認識されている。

食人草の採取には危険が付きまとうため市場には出回りにくく、祝いの席や病床での食事など特別な機会にしか食べられない、希少な食品である。

「珍しいんだからね。だからわざわざ恥を忍んで呼んだわけ。どう、買ってく？」

恥を忍んで、の部分にヴァンはつっかかったようだが、食人草そのものには興味があるらしく、値段を問うた。

「そうねー、普通なら一房五千八百ジェノームだけど、同窓のよしみで四千八百にまけてあげるよ」

「……お前、俺が払えないの知ってて言ってんだろ。ムカツクな……」

「貧乏人さん辛いねー。でも四千八百っていったら相場よりすんごい安いんだからね。なけなしの小遣いはたいて買いなよ！　損しない。絶ッ対損しない！」

「スラム街」――ホゥが何気なく放ったその言葉に、私は意識を囚われていた。黙っていれば飢え死ぬ彼らには物を盗む以外生きるつてがなく、しかしそれをすれば市民の反感を買い、疎まれる。誰も彼らを助けようとしない。ただ汚らしい、下賤だと蔑むばかりだ。

「ぐっ……安くされてもまだ高いものは高いんだよ！」

「ケチっていうかなんていうか。ヴァン、あなた今いくら持ってるわけ？　本当に四千八百も持ってないならそれはそれで笑いの種よ？」

「……五千ジェノーム」

「いいじゃん！　買っちゃいなよ！　ほらほら、美味しいよ！」

苦しんでいるのに、誰も理解しようとしない。一度夢を見て、絞り取られた残り滓だから？　大人はそうかもしれない。でも、子供は違うはずだ。

「美味しくても高いと買えないの！　当たり前のことじゃねーか！　なんでお前そんな無理して買わせるんだよ！」

「なんでって、あなただけで食べるわけじゃないでしょ？　そこの女の子と一緒に食べてほしいから、執拗にリコメンドしてるんじゃないの」
「……お前、こいつを何だと思ってる？」
「『カノジョ』でしょ、カノジョ」
「違う！」

西区――市場の簡素な屋根の群の向こうに、整然と立ち並ぶいくつもの集合住宅がある。ここからそう遠くはない。

行ってみようか。
そう、思ってしまった。

思うと行うは同時だった。問答に気を割くヴァンとホゥを尻目に、さっきの少年の逃げた方へ走り出す。
隣から私がいなくなったのに気付いたヴァンは、手に持っていた食人草を投げ出して後を追う。数秒の間宙を舞った食人草は、ホゥが見事にキャッチして再び店頭に並んだ。

「おい、アム、どこ行くんだ！」

振り向かずに前進する。紙袋に大量の食品を買い込んだ婦人や、仕事を終えて市場に足を運んだ中年男性、母親の姿を探して泣きじゃくる迷子の間を縫い、食材屋の隙間の狭い通路を掻き分けて中央区と西区の境界へと走った。

第二話：第二世界の意の談義　ー３ー（後書き）

結構長くなってしまったので第二話まだ続きます……
読んでいて面白いものが書けていれば、それでいいかな。

ちなみに本作の登場人物は、一部を除き、ある規則の上に名前がつけられています。
お暇でしたら考えてみてください。

３／１７　改行を増やしました。
「食人草」の外見のモデルはポケモンのマスキッパです。

第二話：第二世界の意の談義　―４―（前書き）

◆登場人物◆

「ねぇ、ヴァン。聞いて」
　―――異世界の少女　アム
「アム！　……ったく、いきなり走って行っちまうから何事かと思ったぜ」
　―――ズィーベンの配達局員　ヴァン・リンデマン
「――哀れだからだ」
　―――「殺人鬼」　エスト・ヴェイユ

第二話：第二世界の意の談義　―４―

林立する集合住宅は全てが三階建てである。
需要と供給のバランスを考慮せず建てられたこれら石製の建築物は、今となってはどの部屋にも正規の主を持たず、スラム街の住人の都合良い風除けとなって存在している。一切の明かりは無く、ところどころの窓はガラスを割られ、「人」の営みが微塵も感じられない静寂の圧力で満ちている。

区の境目に、紫鉄鋼製の槍を装備した警備軍が配置されていた。
逸＞はや＜る足を緩めて西区の旧住宅街へ近づくと、案の定その一人が寄ってきて私の行く手を阻んだ。

「西区に『殺人鬼』が出現した。ここを通ることはまかりならん」

「殺人鬼」。これはこれで、私の好奇心を掻き立てるものだった。西区に行けば、「殺人鬼」とも会えるのではないか。

「どうしても通してくれない？　私、性格以外にどこも変わったところ無いから大丈夫だよ？」
「駄目だ！」
怒鳴られる。仕事熱心だ。

「アム！　……ったく、いきなり走って行っちまうから何事かと思ったぜ」

ヴァン・リンデマン……彼の姿を見て、私は考えた。好奇心を満たすということ、それは私をどうしていくのだろう。
一つ気になったことを知るために、私は西区に入ろうとしている。

そこでスラムの住人を見て、「殺人鬼」に会ったら、そのあと私はどうしようと思うだろう？　新しく気になったことを知るために、他のもっと遠いところへまた行ってしまうのではないだろうか。
　それを何度も繰り返していたら、私は二度とズィーベン市へ戻ってこないかもしれない。二度とヴァンやフレーゲ夫妻と会うことがないかもしれない……。そんな旅をするだけの冒険心は持ち合わせている。だから、もし二度と会えることがなくなってもいいように、私は言うことを言っておくべきだろう。

「ねぇ、ヴァン。聞いて」

　ヴァンは肩を上下させて胸式呼吸していた。フロートモビルに乗るばかりで、運動が足りていないのかもしれない。

「私ね、今日一日、ヴァンと一緒にいられて楽しかったよ。バーテルのこと、色々教えてくれてありがとね」
　一ヶ月で習得したヴェルティア語を駆使し、ヴァンに思いの丈を伝える。

「はぁ？　お前、突然何を言って……」

　私は集合住宅の屋根を見つめた。三階建て、仰角四十度といったところ。言葉を切って宙の一点に視点を注ぎ始めた私を、ヴァンと警備軍兵士は訝った。

「あっ！　あれって！――」
　二人の目線が一斉に空中へ向かった。私はそのうちヴァンだけを弱く小突き、一言「バイバイ」と言葉をかけて、足を踏み出した。
　一瞬の困惑の後、事態に気付いたヴァンと、初めから何もない高所を仰ぎ、気を散らしている警備軍兵士を背後にして、私は西区ス

ラム街へ突入した。

太陽＞ソル＜が月＞ルナ＜へ空の支配を開け渡そうとしている。
しかしズィーベン西区スラム街は、現在時刻を上回る濃さの闇を、建物と建物の間に落としていた。それは都市計画の失敗という過去であり、格差ある社会の淀みであり、絶望に全身を浸した人間達の心の反映だった。

私は――とにかく、前へ進もうと決めた。諸所の剥がれた石畳に足を取られぬよう、慎重に歩み進む。

スラム街の路地には、驚くほどに物が無い。ともすればただのゴーストタウンとも見紛うほど、生活感がなく、物に乏しかった。それは彼らの生活力の欠如と、彼らの社会における役割の希薄さを示している。
社会的にもぬけの殻であるスラムのあちこちには、集合住宅の建造時には最新鋭の技術であった機術式水道があり、蛇口を捻った跡であろう水漏れのぽたぽたという音が、退屈で陰鬱なリズムと気だるいゆらぎを刻んでいた。

そろそろ、人を見つけても良い頃ではなかろうか、そう思った矢先のことである。
カラン、と乾いた音を立て、私の足元に小石が転がった。私が蹴ったのではない。立ち止まってもなお、カラン、カラン、と連続で転がった。

「誰ッ！？」

気を引き締めて見回すと、いつの間にか、建物のあちこちにもぞ

もぞと動く影が見つかった。スラム街の、小さな子どもたちだった。
泥の中でもがくようにその動作は重く、力の入らないやせ細った腕で小石を投げている。その行為には貧民街の外で暮らす人間に対する夥>おびただ<しい羨望と憎悪がこもっていたが、しかし同じくらい無気力でもあり、機械的な投石によって、彼らの精神に遍く敷き詰められた感情をとりあえず処理しているような物悲しさがあった。

「あ、あなたたち……！」

投げられた小石は、しかし一つたりとも私に当たらなかった。それほど飛距離を出して投げる体力が無いのだろうか、それとも、投げはするが人には当てない程度の優しさを持っているのだろうか。
分からなかった。私には、彼らのことが分からなかった。どれだけ苦しくて悔しくて、こんなことをしているのか。

彼らは被害者である。しかし責任が特定の人物に属するわけではない。彼らにとって、周囲を取り巻く全ての人間はいずれも「悪」たりえない。
でも彼らを遇するのは常に絶望である。構図として理解していても、我々がその体感的な辛さを知る手段はない。それどころか、人々はますます疎んじる。

一片>ひとひら<の小石が、弱々しく靴底を叩いた。
それ以降、石を投げる音はぱったりとやみ、再びスラム街が静寂で充満した。

投げられた小石を、右に左に蹴って弄んだ。
石畳のかけらである尖った小石は、蹴るごとにその角が取れて行き、丸くなっていく。やがて馬鹿馬鹿しくなって、利き足で遠いと

ころに飛ばしてしまった。

その時だった。

スラムの住人と思しき数人の子供の悲鳴が、音を忘れた旧住宅街に響き渡った。或いは急停車する車のタイヤのような、或いはスピーカーのハウリングのような、或いは拙い奏者の弦楽器のような、どれも不吉で狂気的な音色だった。

はっとして周囲に目を配る。ここからそう離れていない場所での出来事である。前後を鑑みることなく、私は地を蹴り、悲鳴の音源へと疾走した。

太陽の残滓が山の端から淡く世界を照らし、空はまもなく月の領分となろうとしている。

夢の残滓達の住み着いたスラムは色を抜かれたように無彩色と変じ、気だるさをよりいっそう深めた。

私は、建物の間を走りながら気が付いた。

左右、流れて行く灰色の景色の中で、住人達はただそれぞれの場所に座っている。痛ましい悲鳴がスラムの空気を震わせたというのに、彼らは様子を見に行く気配もない。俯き、無沙汰な両手に目を落としているだけ。

彼らには、他人を慮る余裕がないのだった。自分のことだけで精一杯で、肉体的にも精神的にも他人を気遣う余力がなかった。彼らの間には、食糧のやり取りなどあくまで生命を維持するための最低限の繋がりが存在するのみで、それ以上自分の領域に他人を踏み込ませることはない。

事務的かつ排他的。此度の子供の悲鳴も、事態の大小によっては調達する食糧がこれからは少なくて済むかもしれないと、彼らが心

の片隅に青い血を流したような算用を生んでいる可能性が否定しきれない。
やはり悲しいな、と私は思った。
旧住宅街Ｂ－５棟、角を曲がり、声のした方へ。

放棄された集合住宅の壁面は、ところどころ塗装が落ちてはいるが、常ならば概ね白色である。太陽の薄明かりがいくらか残るこの刻限に私が見た光景には、引きずったように伸びる鮮血の赤いラインと、「その男」が手にしていた長剣の尖鋭な青があった。

壮絶な二色のコントラストと微風に煽られる金属臭の中で、私は思いのほか冷静に地面に転がったものを数えていた。大きな塊、小さな塊、それぞれ八つ。大小を思考の内で接着してみると、それはヒトの形になった。
「首を刎ねられた屍が八体」。視覚情報をようやっと咀嚼して、私は事実として飲み込んだ。

斃＞たお＜れた人間の中心に、「それ」は佇立していた。
背中を向ける彼のマントはボロ切れで、その合間から覗く漆黒の上下も穴だらけだった。露出された筋肉質な腕には無数の古い傷跡が走り、まるで刃物の海を泳いできたかのようである。
右腕の先には、輝く青色の透明な刀身を持った長剣が握られている。宝石製だろうか。青色の光は猛烈な存在感を放ち、私は少しの間、心の底からその美しさに見とれていた。

側の水道の蛇口から一滴の水が滴り落ち、ぽたっという音を立てて地面を湿らせた。

「その男」が振り向く。時間が未来へ進むことを捨てたかのように、私と「彼」はしばらく対峙した。
「彼」の瞳は剣と同じ青色だった。顔面にはやはり夥しい数の傷を付け、その密度は老人の皺を思わせるものがある。それらを除外した素顔を想像してみると、年齢は私より少しだけ上のように思われた。
しかしマントが風になびくほかには微動だにしないそのシルエットと、この世の負の側面を全て悟ったような憂愁の表情から、どちらにしろ私は「彼」に老けた印象を覚えずにはいられなかった。

凝り固まった時をほぐしたのは私だった。
何歩か前に出て、臆さず一つの質問をしてみる。怒りも悲しみもこもらない、それは純粋な疑問だった。
「これ、あなたがやったの？」

八人の死体を俯瞰する。引きずったような血の跡は、斬られた首から自らの圧力で噴き出した血液が、直線状に飛び散ったものである。

「そうだ」
「男」は存外素直に回答した。しかし、低すぎる声のトーンはフレーズにほとんど抑揚をつけず、ボソボソとして聞き取りにくいことこの上ない。

「この子達に、罪があるの？」
地面に落ちた頭蓋はスラムの少年達のそれだった。どれも唖然とした表情で転がっている。

「無い」
毅然として答えた。「確信犯」というやつなのだろう。正しいほ

うの意味で。

「だったら、どうして殺したのよ？」

男は剣を鞘に仕舞った。人を斬ったはずの剣には一切の血糊が見て取れない。拭き取ったのだろうか。彼は青白い眼を静かに閉じ、顔をほんの少し上に向けたが、私の問いには答えなかった。

「……」

二度目の沈黙が二人の距離を充溢する。殺人について私が最も気になったのは動機だった。人が何かをするとき、そこには大きかれ小さかれ必ず理由が存在する。「何となく」というのも、つまらなくはあるが、ある種の動機といえなくはない。

動機とはエピソード的情報である。「世界で最も価値の低い通貨は何か」などといった無駄な知識的情報と同じように、そこにはトリビアルな興味を引かれるものだ。無論、それは死者への愚弄とは別物だ。

「じゃあさ、質問を変えるよ。どうして『彼ら』を殺したの？」

対象が、どうして社会的弱者であるのか。男は、こちらの問いに対しては、その薄い唇を開き、答える。

「――哀れだからだ」

短い文言の中に、僅かだが色が含まれていた。それは「意志」と呼ばれる崇高な心の片鱗である。この男は、確かに「哀れだから」という理由で立場の弱い者を選び、殺している。

「そうやって、世界中を回って人を殺めてきたのね、『殺人鬼』さん？」

相手は無言の肯定をした。人を殺してきた事実に肯>がえん<じて、「殺人鬼」という血生臭い呼ばれ方を甘受した、微妙な態度の表れだった。

「犯罪者を見かけたのなら、戻って警備軍にでも通報するといい。もっとも、呼んで帰ってくるまでここで待っているつもりは無いがな」

「殺人鬼」は身を翻し、血の海を後にしようとした。好奇心で垂涎必至のミステリアスな存在が、ここから去ろうとしている。

私は慌てて句を紡いだ。心に引っかかって、「殺人鬼」が思わず足を止めるようなフレーズを。

「待ちなさいよ！　あなた、『本当にこの子達を殺したの』？」

「……何？」

歩みが止まる。ひとまず成功といえるだろう。続けて、思いつきの釣り餌を状況で修飾する。

「私、あなたがこの子達を手に掛けたところをリアルタイムで見たわけじゃないもの。あなたがたまたまここにいただけかもしれないじゃない？」

「殺人鬼」は私を胡散臭そうに睨んだ。大きくは表情に出ずとも、どんなことを考えているか大体分かる。

「殺したさ。状況証拠は豊富だろう」

豊富とは彼自身の手によって人生を終えた人間の数のことである。少年達の血液は空気の成分と結びついて酸化し、水分を失って干か

らび始めている。
金属臭を乗せた微風を、彼は私と同じくここで浴びていた。彼の精神は機能的には正常で、内容的には異常だった。地球の司法の用語を用いれば、「責任能力がある」ということだ。
「でもあなたの剣には血が付いてなかったでしょ？　本当にその剣で人を斬ったのかしら？」
「殺人鬼」は鞘から剣を取り出す。その恐ろしいまでの存在感に私はまた目と心を奪われそうになったが、目をいったん力いっぱいに閉じ、強制的に視界から追放した。
「これは特別な剣だ。血糊など付かない」
彼は長剣の蒼い刃を既に傷だらけな二の腕の外側にあてがい、軽くスライドさせた。私は、今度は違った意味で目を閉じたくなった。
はじめは紅い筋、徐々にその先端に滲み出た血液が丸く溜まり、やがて表面張力を破って落下する。その雫を男が長剣の刃で受けとめると、血の一滴は一切の跡を残さずして刃をするすると伝い、剣先から脱落した。血液の粘度からしてありえない事象である。
唖然とした私に一瞥をくれてから、男は剣を収めた。鍔が鞘に接触するカチッという音が、私の妙な敗北感を刺激する。
「だ、だからなんだっていうのよ。あなたの剣が少し特別だからって、この子達を殺したことにはならないでしょ！」
彼は無意味に食い下がる少女に辟易した。二度と戯言に応ずまいとして、今度こそ戯けた少女を背後にする。
「お前が何をしたいのか、理解できない。俺はそろそろ行く」
あしらわれる前兆を察知した。ここで怪気炎を上げなければ、大

きな魚を捕り逃がす。
狭小な見聞の版図ではあるが、「殺人鬼」はヴェルティアスにおいて今のところ最も興味を引かれる事柄だ。そして、気になったことは地の果てまで追いつめても解き明かす。それが、私だ。

「じゃあ、こうしましょう。私があなたについていって、みてあげる。あなたが本当に人を殺せるのかどうか。気になっちゃったのよねー。もしあなたが人殺しなら、どうしてそんなことをするのかってところまで。どう、それでいい？」

「殺人鬼」は社会的弱者を求めて世界を転々としている。彼の秘密を暴くため同行すれば、世界中を旅して回り、ヴェルティアスについて多くのことを知る機会が得られるはずだ。横溢する冒険心をイカダにして、未知の大海に乗り出そう。

『歩かなきゃさ、何も見られないんだって。前に進んで、色んな人に出会えよ』
ヴァン・リンデマンはそう言った。「殺人鬼」との邂逅は、その絶好の端緒となりうる。

「勝手にしろ」
殺人鬼は告げる。拒絶ではない。ならば、彼にどこまでもついていこう。糊の如く執拗に、鉄の如く頑強に。もっとも、拒絶されたところで私の考えは揺るがないとは思ったが。

彼が大股で歩き出す。私はそれに駆け足気味で追いついた。
「お言葉に甘えるわよ」

時折くるくると回りつつも、早足な彼と歩調を合わせる。彼は私に愛想など見せる様子も無かったが、驚くほどしっかりと前を見据

え、前進していた。決して口外しない信念を孕んだ、まっすぐな目だった。

ふと私は、彼をアイデンティファイする最も単純な要素を知らないことに気付いた。誰にでも一つずつあるもの。他人のそれに、彼が横線を引いて回っているもの。

「あなた、名前はなんていうの？」

「殺人鬼」はしばらく黙って行進した後、少しばかり本意でない様子で答えた。

「『エスト・ヴェイユ』」

月光の照らし出す廃れた住宅街に、殺人鬼の名が小さく響いた。

一か月前――。

地球での退屈な生活。そこに突然現れた異世界への扉。

私を喚んだヴェルティアスの「女神」の声はこう言った。

「私達の世界を、見守ってください」

新たな世界へと足を踏み入れ、「殺人鬼」との道の旅路が幕を開けた。

第二話：第二世界の意の談義　－４－（後書き）

ここまでがあらすじの内容になります。
ここからが本番です。

不定期にはなりますが週一回くらいの頻度で更新したいと思うのでよろしくね。

３／１７　改行を追加しました。

閑話一：Yulei manis ppel "Esd"

ユレイ・マニス・ペル・エスト
（彼の名前はエストといいます）

■登場人物■

「臭い、臭いよ、エスト！」
――――異世界の少女　アム
「嘘と冗談で包み隠すほど、俺は親切でもずる賢くもない」
――――「殺人鬼」　エスト・ヴェイユ

閑話一：Yulei manis ppel "Esd"

小型貨客船サン・ファルタン号――ヴェルティアスの「始祖」の名を冠するというこの船は、水没都市に近いレアニ・アハト港を出てバーテル大陸北東のクラヴィテ海峡を北上していた。

私がいるのはこの船で最も安価な客室である。「基本的には」一人で利用しているのだから、外側の壁面がやや湾曲した狭小な客室でもなんら問題はないのだった。

歪んだ壁の近くに置かれた小さな机に向かい、丸い小窓から時おり海原を覗き見て楽しんでいた。

問題があるとすれば、単語力不足なヴェルティア語の習熟度と、如何ともしがたい陰鬱な精神状態だった。

数日前、学園都市ゼクスのとあるアパート一室にて少女の首が斬り飛ばされる光景を網膜に映してからというもの、暗澹とした黒雲が心に拡がり渡って晴れる様子を見せない。

出来るのかとけしかけたのは私だ。しかし使嗾したとして実行に移すと誰が予想できるだろう。

罪悪感が生まれては消え生まれては消えしていたが、言わなければあのコレットという少女が殺されなかったのかといえば、エスト・ヴェイユの性格からしてそうならないわけはなかったとも思う……。

何にせよ、このマイナス方向に針の振れた感情は、悶々として考え続けるだけでは解消されそうにない。

だから私はせめて前者の問題を解決しようと、ジント・フレーゲに渡された手帳サイズの参考書「基礎ヴェルティア語講座・初等編第六版」を机に広げ、部屋に備え付けのメモ帳と筆記用具を用いて文法の習得に勤しんでいた。

『Esd　FFeiy　sis　ppel　rawssatrei　pp　selsosi　erkkork.（エスト・ヴェイユは殺人鬼である）』

エスト・ヴェイユ・シス・ベル・ラーザスレイブ・セルソシ・エルゴルク。

適当な一文をメモ用紙にしたため、声に出して読んでみた。

文法には誤りがない。発音も合っているだろう。ズィーベンやゼクスで初対面の人々と会話し、難なく言葉が通じたことから、発音に関してはそれなりの自信を持っていた。

「……！」

書いてみてから気が付いたが、殺人鬼の名前が分かるこのメモ用紙、このまま放っていては大変なことになるのではないか――。

慌てて表面の一枚を剥ぎ取り、クシャクシャに一センチ台まで丸めてゴミ箱へ放り込んだ。

ヴェルティア語は、語順だけなら日本語に近い言語である。

「語幹」と呼ばれる意味の中核と、品詞、人称、時制、格、敬語を決定する「活用語尾」、複数形や受動態、否定などの意味を付加する「接頭辞」を組み合わせて一つの単語が完成し、それらは概ねどの語順で並べても文章として成立する。

綴り字は「アーチェティエ」と呼ばれ、基本的にラテンアルファベットのbとqを除いた二十四文字を使用する。母音はア、エ、イ、オ、ウの五種類、子音は二十五種類。発音は特定の語幹カテゴリを除けば規則的で、日本語にない子音も存在するがそれほど習得に時間はかからない。

が、何であれ母国語にあらざる言語を実用レベルまで訓練するのは容易なものではなかった。
ほとんど日本語しか話せない私にとって、英語や第二外国語とヴェルティア語の違いは国境と世界のどちらを跨いだかというただ一点のみである。中学、高校と数年間英語を学習しても、英語圏の人間を見るやいなや身震いを覚えるのだ。一ヶ月でここまでヴェルティア語を習得できたのは、単純に必要性が英語に比べて段違いに先だったからにすぎない。

『Ｆｅｌｄｉａｎｉｓ　ｐｐｅｌ　ｒｅｐｕｓｉｌ　ｎｅｓｓｅｉ．（ヴェルティア語はとても難しい）』

ヴェルティアニス・ベル・レプシル・ネゼイ。
言語のもどかしさを晴らすため、今まで何度この一文を書き殴ったことか。この二枚目のメモを破り捨てると、私はぷっつりと集中力を切らして側の小窓の虜となった。
金属製の丸枠の中を、淡青の空と濃青の海が軽い曲線で二分している。空には海鳥、海には飛沫＞しぶき＜が白いアクセントを穿ち、その画は聊か単調ながらも、青色で描かれた水墨画のようで、一つの完成した芸術品に思われた。

「はぁ……やっぱり海は良いなぁ……」

船首が海面を割いて生まれた人工の波が、船から離れる程に勢いを失って流れていく。この船が前へ進んでいる証だ。
サン・ファルタン号は――というよりヴェルティアスにおける船のほとんどは、風を受けることで前進する帆船である。ヴェルティアスではまだ船を動かすほど大型の機術エンジンが開発されていないのだ。
そのため船の内部には船体に衝突する波の音以外の騒音がなく、

耳にも快い環境だった。

――とそこに、コツ、コツ、コツ、という足音が混入した。木製の床板が細かく軋んで鳴いた。

船員だろうか？　乗船前に予め伝えられていた船内清掃時刻にはまだ幾刻か早い。足音は私の船室の前で停止し、ガチャリと取っ手が回されて扉が開いた。

「……エスト、ここに来て大丈夫なの？」

質より状態の面でみすぼらしい服装の、一人の男が現れた。腰のベルトに剣を佩き、体中に恒河沙の傷を刻む彼の名はエスト・ヴェイユ。ヴェルティアスを震撼させる「殺人鬼」である。

「殺人鬼の上に『密航者』でもあるんだから。ダブルで逮捕対象なの、頭に入れといてよね」

国際手配されるほどの重犯罪者が通常の方法で船に乗れるわけなどなかった。

彼は船員の目を盗んで貨客船のコンテナ（それも木製）に忍び込むという、極めて古典的な手法で密航を図ったのである。船員の中には付近の生体反応を察知する構成術を持った者もおり、貨物の検査にあたっていたということだが、どうやってそのチェックを通り抜けたのかは全くの謎だった。

「問題ない」

ないわけはないのだが、いざというときには自己責任で切り抜けるだろうと期待し、それ以上の口を挟まずにおいた。

「何をしていた？」

エスト・ヴェイユの不気味な蒼い目が、疑り深く私とその周りを観察した。

「海を見てたの。分かるでしょ？　風情は解せないかもだけど」

やがて両目の焦点が机の上に定まる。そこには初等編のヴェルティア語教本――ヴェルティアスの人間から見ると「初等学校向けの国語の参考書」が置かれている。私は地球で高校生、ヴェルティアスでは高等学校にあたる年齢である。そして私は異世界人であることをエストに明かしていない。

「高等学校の年齢で、初等教育の国語の参考書を読んでいる」。地球でいったら高校生が九九を学んでいるようなものだ。これを不自然と言わずしてなんと言う？

「それは――」

何だ、と疑問詞が投げかけられる前に、私は手帳サイズの教本を懐に仕舞ってまくし立てる。

「手帳！　ただの手帳だよ！　でもね、ちょっとした日記代わりにもしてるから、中は見せられないの！　いい？　見せられないんだからね！」

「……おかしな奴だ」

エストにだけは、言われたくなかった。

訳の分からない男である。身なりも、素性も、思考も、何もかも。しかし理解できないからこそ、同行したのだった。私の現在＞いま＜はエスト・ヴェイユの知られざる部分を暴くためにある。彼の深遠なる黒を明らめるため、私は真実がその尻尾を現すのをひたすら待っていた。

エストは投やり気味に壁へ体をもたれかけた。
ベルトから垂れ下がった長剣の鞘が、ガツリと音を立てて木壁を叩く。気にする様子もない。目撃情報のほとんどに登場する愛用の剣らしからぬ、乱暴な扱いだった。

「ねぇ、エスト。その剣、なんていうの？」

私は端緒を彼の剣に求めた。長い間この剣で人を殺し続けてきたのだから、思い出話のひとつでも聞けるのではないかと考えたのだ。エストはあくまで事務的に、青色の剣の名前を一言投げた。

「『エスティス』」

面白みの欠片もなかった。人を殺すためのものに、わざわざ凝った名称を与える気はないということか。しかし人名をほとんどそのままつけて呼ぶとは、悪趣味が極まると言わざるを得ない。それも、

「自分の名前をつけるなんてね」

からかうように言ってみる。
――エストは腰に手をかけて剣を抜き、先を私へと向けた。怒らせてしまったのかと思って私は身構えたが、切先の延長線は私からやや外れており、目線のちょうど先には両刃の刀身の側面があった。気泡を含んだ青く透明な刃の表面に、ヴェルティア語特有の傾斜した字体で単語が彫刻されている。

『ＥＳＤＩＴ』

エスディット――ではなく、エスティスである。ヴェルティア語においてはＤはタ行、Ｔは舌を歯に当てるサ行で発音される。

刃の該当部分に目が走ったのを確認して、エストは長剣を鞘に収めた。今まで幾多の人間の首を裁断してきた得物が目の前から離れて、私はやっと凝固したような硬直から解放された。

「わ、わざわざ見せてくれてありがとう。びっくりしちゃった……」

エストはどうでもよさそうに鼻を鳴らして、壁に体重を預ける元の体勢へ戻った。性能はともかくとして、武器をいきなり他人に向けて謝罪の一つもないエストに軽い憤りを覚えたが、言ってこのような所作を改める性格でもないだろうから今のところは不問としておくことにする。

彼は腕を組み、俯き加減で目を閉じていた。どうやらしばらくここに居座るつもりのようである。

彼のいられる時間は、長く見ても船室清掃に船員がやってくるまでだろう。この部屋にはエストが身を隠せるほど物が置かれていないのだ。彼には頃合を見て船倉に戻り、ネズミ達と共にまたコンテナへ収まってもらうことにしよう。

「その“エスティス”って剣、『特別だ』って言ってたけど、つまりどういう風に特別なわけ？」

それまでには、彼について尽きない数多の疑問の手掛かりを少しでも掴んでおきたかった。ほぼ終日エストと一緒にいるといっても、落ち着いて話すチャンスはなかなか無い。人を殺すため常に動き回る「殺人鬼」のスケジュールには、私のような金魚の糞とゆっくり会話する時間は入り込む余地がなかった。

エストは“エスティス”の柄に手をかけて抜き放ち、その場で何度か素振りをした。私はついさっきの経験から、反射的に両手を上

げる。
いくつかの青い剣筋が美しい扇形を描いて「空」を切った後、“エスティス”は元の鞘へ舞うように戻った。
「この剣はあらゆるものを斬ることが出来る」
子供の冗談みたいなことを言った。本人はいたって真面目だったが、私は不覚にも湧いてきた笑いをこらえるのに内心必死だった。
彼はユーモアとは無縁の存在のはずだが、意外にも間の抜けた「殺人鬼」であるのかも知れない。笑いの風船を爆発させないよう腐心する。
「何でも斬れるっていうの？　本気？　なんか馬鹿っぽ――」
と、不意に嗅覚の異変を感得する。それまではほのかな潮の香りが爽やかだった空間に、化学の時間、薬品をこぼしたような臭気が漂っている。付近にこんな異臭を発するものがあるわけではない。
「臭い、臭いよ、エスト！」
「俺が臭いんじゃない」
臭そうな恰好はしているが、のたまう通り、今まで一緒にいてこのような刺激臭を感じたことはない。エストは誤解を晴らすため……ではないだろうが、説明する。
「空気中の物質は、微視構成物理学的に分解すると特有のにおいをもつものに変化する」
微視構成物理学というのは、地球でいうところの化学、ケミストリーである。ただし内容的には理論化学（物理化学）の領域が主と

なり、ヴェルティアスでは物理学の一部として扱われる。有機無機化学や応用化学にあたる内容は材料分子学と呼ばれ、工学の一分野として学習、研究される。
この世界には「化学」という言葉が存在しないのだ。ヴェルティアスでは物質が「分子」以下の規模で変化するとき、物理学の問題として議論される。

「……へっ？」

目を点にした。つまり彼の剣“エスティス”はさきほどの素振りで空気中の分子を切断して物質の分解という化学反応を発生させ、反応後の刺激臭をもつ気体を私が吸い込んだということである。
『あらゆるものを斬ることが出来る』。それは柔らかい、硬いという次元を超越した、まさに特別な能力を持つ刀剣を表現する言葉だった。

「分かるか、お前に？」

分かるようで、分からない。

船が波に揺れ、船体の各所がキリキリと負担を訴えた。音そのものはやや耳障りだが、船の揺れる間隔に合わせたゆったりとしたリズムが心地よく、これはこれで耳の揺り籠となって心を安らげた。
窓から覗き見る空には徐々に雲が現れ始めている。太陽＞ソル＜の恩恵を失った天と海は、空間を白黒コピーするように、鮮やかだったその青色を褪せさせた。
エストは私の小さな船室にまだ居座っていた。壁に体重を預け腕組みする例の体勢で、あれ以降一言も発さずに佇立している。

この男、何をしたくてここにいるのだろう。人の声が聞きたくて来ている風ではないし、人がそばにいて安心する性分でもない。物言わず不動たるところでは本棚や机といった備品と等しいが、人の役に立つことは何もしないのできっとそれ以下である。

天候が悪化し、風が少し勢いを増して海面の波を高くした。船としては小型のサン・ファルタン号は、小さな波でも影響を強く受けて大きく揺らぐ。船を為す各所の木材が、いっそうの負担を軋みの形で主張する。

キィィィィ、という長く甲高い軋轢音。

私はその響きに、ヴェルティアスで辿って来たある一場面を鮮明に想起して、さっと心が凍りつくのを感じた。

コレット・クラメルの死に際の叫び、アリス・モルガンの死を嘆く叫び。学生アパートの一室から住居群へ、狂乱と激高をこれでもかと積載した二人の叫喚は異常な波動となって響き渡り、一帯の人々を猛烈に震撼させた。

その歪曲した感情の音波を、私はすぐ近くで浴びていた。こんな事象が起こり得るのかと、心の内側を津波のように暴れさせながら。

「ねぇ、あなたってさ、本当に人を殺すのね。びっくりしちゃった」

目の前で殺されなければ、エストが殺した確証にはならない――。そんなふざけた論理を振りかざし、この男に同行する言い訳とした。面白ければ何でもいいスタンスの私にとって、エストに人が殺せるのかどうかという点は、悪く言ってしまえばそれ自体が一つの楽しみだった。

ヒト一人の人生が終わる、そんなことはそのときどうでもよくて、人が死ぬ、殺される、それも自分の目の前で……そんな状況がとてもイレギュラーだったから、見てみたい気持ちが心のどこかにあっ

たのだ。私は思う。

イレギュラー、稀なこと、非現実、それらはどんなに不謹慎なことであったとしても、起こってしまえばある種の「楽しみ」である。普段は発生しない事象に自分が立ち会っている喜び。

それはきっと、買い物に行って大幅に安売りされている商品を発見した時のような喜びを何倍にも増幅しただけであって、基本的な性質は何も変わらないのではないか。人間は、希少性の高い事柄を観測することに嬉しさを感じる動物なのだろう。

私は、コレット・クラメルが死んで、実は心のどこかで楽しいと思っていた。

だが、ふとそんな罰当たりな気分から現実へ帰ると、急激に事実の冷静な考察が得られ、決壊したダムのように嫌悪感と悲しみが襲来してくるのである。

船に乗り、私は間断なく進行する「殺人鬼」のスケジュールの中でひと時の安息を獲得した。その「私の時間」に、私はあのアパートでの出来事を顧みた。

私は、何をしていたのか。

エストは、何をしたのか。

浮ついた喜びで見えなくなっていた、「事実」という棘だらけの核心を、私はようやく咀嚼した。そして、先の質問に辿り着く。

「嘘と冗談で包み隠すほど、俺は親切でもずる賢くもない」

「殺人鬼」エスト・ヴェイユは答える。徹底して、淡々と。

現実を直視している。目を逸らさない、逃げない、隠さない。彼の殺人は、責任能力がない状態におけるものでも、理由が存在しないものでもなく、責任能力と理由が併存して意志的に行われるもの

である。
しかし、人を殺したという事実は私なんかより余程強い自覚を持って捉え、その責任が全て自分に所在することを理解している。それでなお彼は人を殺しているのだ。
「全て、俺の言った通りだ。何も粉飾していない。俺は、人を、殺す」
その言葉に、彼の「色」があった。色とは意志である。人を殺すことに関してだけ、彼は発言に色を持たせる。そしてその色は決して消えず、過去のそれをずっと引き摺り、これからも行く先々継いでいく決意がある。時々彼は振り返り、その軌跡を見直すのだ。
こんなにはっきりしていた。それなのに、私は……
――海と同じ味の液体が、小さな机を濡らした。

エスト・ヴェイユ。「殺人鬼」である彼のことを、私は少しでも分かったのだと思う。だが、彼の意志の大きさを明瞭に理解したことで、さらなる疑問が発生、過熱した。
学問に携わる人々は言う。「物事を知るほど、知らないことが多くあることを知るのだ」と。エスト・ヴェイユもそうだった。彼が何故人を殺すのか――そのことを、私はこれまで以上に意識するようになっていた。
彼が強い意志で動いている事実を知り、また、彼について知りたいという気持ちが強くなった。
私は、改めて意を決する。彼についていこう、と。
彼との旅路の先に何が待つのか。それは、「神のみぞ知る」といったところなのだろう。

船は、レアニ・ツェーンの港へ到着した。新たな土地フィー・レ大陸へ、私達は踏み出す。

閑話一：Yulei manis ppel "Esd"

このあたりがだいたい、アムとエスト二人の主人公の基本的な心境の描写となります。
キャラクターを「理解してもらえれば」いいです。好きでも嫌いでもかまいません。
そしてエストが無感情に人を殺すだけの意味の無い小説でないことも分かっていただけると嬉しいです。
次の話ではまた、社会的に弱い部分がある人間が殺される流れになります。
一話が長めなので、お暇なときにでもゆっくり読んでいただければと思います。

３／４　サブタイトルと前書きを修正しました。
３／１７　改行を追加しました。

第三話：断崖世界の苦の談義　―1―（前書き）

◆登場人物◆

構成術を失った青年　エゼロ・カルダーノ
エゼロのライバル　フォスト・デル・フェッロ

第三話：断崖世界の苦の談義　―１―

エゼロ・カルダーノは拳を握った。
夕刻の紅色の光が、“医学都市”ノインの繁華街に赤みを落とす。高層建築たちの合間あいまに細長く差し込んだ光の様子は、さながら人の血を吸ったナイフである。

とある路地裏には二十歳そこそこの男が二人、握り拳を構えて向き合っている。
黒いライダース・ジャケットを羽織り、今にも飛びかからんとする血の気の多い黒髪の若者は、エゼロ・カルダーノ。対して黄土色がかったグレーの作業服を着用し、エゼロをなめきったように見下ろす長身でオールバックの男は、フォスト・デル・フェッロ。

中等学校、高等学校と学年を共にし、幾度となく拳を交えてきたこの二人は、卒業して別々の道へと分かれた今もなお、喧嘩というものに飽き足る様子がなかった。
レンガ製の地面をざっくり二分する光と影。それらをスタスタと蹴り進み、中背のエゼロは頭一つ分大柄なフォストに躍りかかった。戦いの火蓋が落とされる。

身の軽いエゼロの拳が、絶え間なく怒涛の勢いで放たれる。
踏み込んでは放ち、また踏み込んでは放ち……攻め方として単調なようだが、この狭い路地での攻防はスポーツなどという高尚なものではなく、大人になりきれない孺子＞じゅし＜のつまらない喧嘩にしか過ぎなかった。
フォストは冷静に対処した。体の中心を外す攻撃は軽く避け、たまに向かってくる攻撃は筋肉を隆々と蓄えた両腕で防御する。

彼は心得ている。エゼロ・カルダーノは、「動く的に対してまともな戦いができない」。ゆえに、反撃の体勢を準備しながら常にちょこまかと動きまわっていれば、とりあえず負けることはない。

そしてエゼロは「戦いの流れ」を意識していなかった。体力の温存やスパートをかけるということを知らなかった。常に同じ調子で打ち続け、適当にいなされて、やがて勝手に疲弊する。

それまで単調な防戦に徹し、攻勢の緩んだ一瞬にたった一発を打ち込めば、それでフォストの勝利となる。

太陽が翳り、エゼロの驟雨の如き威勢が翳った。ふらつく脚が重心の移動を鈍らせ、攻撃後、構えに戻る動作に隙が生まれる。

フォストはこれを見逃さなかった――というより、始めからこの時を耽々と狙っていた。フォストの右腕、拳の先が薄く光を宿す。

「構成術」――ヴェルティアスの人間なら、大きかれ小さかれ誰にでも備わっている能力である。人々はこの十人十色のチカラを最大限に活かし、仕事を効率化し、趣味を満喫し、日々の生活を豊かにしている。

エゼロは宿敵のとどめの一撃が腹に入る寸前、この光る拳を苦々しげに見やった。心の口で刹那にありったけの呪詛を吐く。

――この力さえあれば……！

球技でボールを打ったように、エゼロの身体が軽々と宙を舞った。

フォスト・デル・フェッロの構成術は、触れたものを吹き飛ばす能力である。十メートルにも及ぶ距離を地に足付けず飛び、数秒してそこここの木樽を巻き込みながらレンガを転がった。

打ち所は良かったものの身体を強打し、ライダース・ジャケットにも白く平行線を引いたような傷痕が数条走った。

敗北。もはや何度目か知れないが、エゼロは斃されて土を舐めるたびに、受け容れがたいこの二文字への衝撃に硬直する。
フォストは鬱陶しげに舌打ちをして、路地裏の奥へ姿を消した。まるでエゼロなど蚊帳の外である。人としての一部を欠いた者と戦って、勝利したところでどれほどのものかと考えているのだ。

耐え難い屈辱に思わず拳を地に打ちつけた。喉を潰すばかりに咆哮した。これも何度目か知れない。人の世の理不尽に降り積もった憤懣が颶風となり、エゼロの精神の中を吹き荒んだ。
医療備品製造会社と畜産食品の加工会社、二つのビルディングに挟まれた星空を見上げながら、エゼロは過去に思いをはせる。勝利の星が、まだ自分に輝いていたころの記憶である。

――高等学校二年の夏。

とある日の昼休み、窓枠の一つでも落ちてきそうなほど古びた体育館の裏に、エゼロとフォスト、そして数人のガラの悪い男子生徒が集まっていた。エゼロとフォストを除いたこれら男子生徒たちは、全てがフォストの取り巻きであり、エゼロへの積年の恨みを今回こそ果たさんと敵意に目が血走っていた。

この頃のフォストは、まだ髪をおろしていた。ややくすんだ色の長い金髪を中央から左右に分け、晴天の日のからっとした風になびかせていた。この長髪は校則違反であるが、彼は教師に注意されても今まで直したことがない。
この頃から彼の身体は大きかったが、その表情には面倒事に付き合わされる嫌気が冷汗と痙攣を伴って表れている。

向き合うエゼロは心底退屈そうにフォストらを視界へ入れていた。その目は「意味のあるもの」に対する僅かな敬意もなく、道端で食糧の糖を運ぶ矮小なアリを発見した時のようなどうでもよい感情で満たされていた。

これから間違いなく喧嘩が始まるという時に、彼はときおり目線を外しては、爪先をトントンと地面に叩いて靴の履き具合を確かめたり、サラサラとした黒髪が乱れていないかをチェックしたりしていた。

全身からは、戦いに臨む前の引き締まった雰囲気は感じられない。これでフォストらを呼び出したのがエゼロだというのだから、向かい合う彼らは逆鱗をむしられているようなものである。

呼び出しておいて何を始める様子もないエゼロに痺れを切らしたフォスト陣営の一人が、「貴様！」と声を荒げて先制攻撃に走った。フォストが制する暇もなく男子生徒は拳一つで殴りかかり、エゼロが攻撃行動へ転じるきっかけを生んでしまった。

彼を含めてフォスト陣営の全員は、後になってこの最悪の昼休みを振り返り、その場で最も丸く収まったであろう選択肢は「誰かしら教師がやってくるまで事態を動かさずにいること」だったのだろうと考えた。それだけ彼らの被害は甚大で、戦いのさまは屈辱的だった。束になってかかればという彼らの考えは、アリの運ぶ糖より甘いと思い知らされたのである。

男子生徒の猪突を視認すると、エゼロは手の平を彼に向けるように右腕を差し出して「力」を込めた。右の手の平が、それ自体を光源とするように淡く輝く。

エゼロ・カルダーノの「構成術」である。

小さくか弱い、鈴に似た音色が短く響いてから、周囲の草木がザ

ワザワと不吉にそよぎ、体育館の古い材質がガタガタと音を立てた。

それらとほぼ同時だった。向かってきたその男子生徒が、実体のない苦痛に悶えながら、土まみれになって地面をのたうちまわった。彼は両耳をきつく両手で塞ぎ、全方位からの強大な圧力で握りつぶされたように辛苦の声を吐いた。

「大音量の高周波を放出する能力」――それが、エゼロ固有の構成術だった。

男子生徒がエゼロによって手を触れることなく無力化されたのを認識した頃、残りのフォスト陣営にも同様の苦痛が施された。

不可聴領域にある音波により、聴覚と思考能力が著しく圧迫される。それは目で見ることも耳で聞くこともできない、対処不可能な攻撃である。

フォストとその取り巻きは、さながら俎上の魚だった。制服を土で汚しながら身体を屈めるか反るかしながら呻くのみで、多対一という圧倒的有利な状況にありながら、誰一人、指一本、エゼロの身体に触れることもままならなかった。

触れることではじめて発揮されるフォストの能力も、エゼロの構成術の前では益体ない。

エゼロはつまらなかった。はねる魚たちに近付き、無力な彼らの脇腹をひと蹴りした。大して鍛えてもいない細めの脚が打ち込まれると、男子生徒の体はビクッと引き攣り、瞬間的に喚き声が大きくなった。

それだって、楽しいというほどのものではなかったが、蹴られる以上の価値を彼らに認められなかったエゼロは、ただ蹴って蹴り続けた。簡単には起き上がれなくなるまで痛めつけた頃には、既に昼休みは終了し、午後の一コマ目の授業の半ばに差しかかっていた。

そこではじめて構成術を解く。やはり、彼らは起きなかった。
中等学校、高等学校とこんなことばかりを続けていた。構成術で間接的に相手を無力化し、動けなくしたところで攻撃する。それでいつも勝つことができた。
構成術があったからである。
当たり前のように、この手元に。

――自堕落な生活を続けていた。

ズィーベン製照明術機による鮮やかな色の光が、店内を雑多に彩っていた。そこかしこで術機の作動音やジャラジャラという金属音が発生し、一喜一憂する人々の声がそれに混じって耳に障ることこの上ない。

エゼロ・カルダーノは壁面に据え付けられた遊戯術機に目と意識の悉皆を集中させ、後ろを振り返る気は少しもなかった。たかが遊びについて他人のささやかな勝敗に気を割く必要はなかったし、それ以前の単純な会話にも興が乗らない、相手もいない。

毒々しい色調の電飾と剥がれかかった塗装で虚飾した「スロットマシン」がエゼロの相手だった。グルグル上から下へせわしなく流れる絵柄の群と見合い、一勝負あたり三回動かすレバーと強固に握手した。
絵柄は横にも斜めにもさっぱり揃わず、吸い込まれたメダルは不孝にも主の手元へ帰ってこない。飲み込んでそれっきりである。
そういう遊びなのだと思うことがあった。銭でメダルを購い、それをくれてやれば短いあいだ客の相手をする。サービス業としては

それで理に適うが、賭博としては割に合わないし、しかし店側も人手のぶん給与を支払わねばならないのを思うとやはりそういうものである気もした。

メダルを入れる、リールが回る、レバーを倒す。メダルを入れる、リールが回る、レバーを倒す。また、メダルを……

単純なことだった。

単純すぎて、もはや娯楽でなく作業になりつつあった。それを繰り返す、自分すら機械のように、ときどき思う。

単純な中で、使っていない、使う必要のないはずの頭が妙に冴えることがある。お金……サービス業の定義……賭博の形態と損得……店側の都合、給与……メダルの材質、製造法……リールの回転の角速度……レバーを倒してリールが止まるまでのタイムラグ……勝率……賞金の期待値……、くだらないことばかりを考える。細かいことを慮らず、素直に楽しめばいいものを、とよく自分自身に言い聞かせた。

余計なことを考えるのは、それだけの余裕を持っているからだ、というのは、自分で思いついてみて自分で正しいだろうと勝手に扱う仮説である。

払い戻されるかも分からない遊戯に金を費やす行為、もしくはスロットやピンボールといったゲーム自体に楽しみを感じる人々は、仕事や学業といった生活の大部分を占める現実に疲れ、ただそれを癒すためだけに賭博場へやってくる。

だから細かなことを考えずに楽しめる――というより、考える余裕がない。そのように、理論づけている。

学業、仕事――。

エゼロは嫌いな言葉だった。しかし、社会的な地位を得るために、

これらは必要不可欠なことである。
自立のため金銭を獲得すること、もしくはその準備として知識を蓄えること、それを継続してやっているとき、人ははじめて胸を張れる。そして、生きていることを自覚する。

しかし世の中にはそれらが出来ない人間も少なからずいるのだった。
その理由はさまざまだ。病弱、貧困、能力の不適正、失業……数々あるが、その大概は職に恵まれないその人間自身によるものではない。運が味方に付かなかった、そんなやり場のない事情によるものが大半だ。
エゼロもまたその一人に類する。彼の場合、職に就くあたわざる事由は障害だった。外見からは全く判断のつかないことであるが、エゼロにはヴェルティアスの社会で生きていくために最も重要な要素の一つが欠如していた。

「構成術」。これもエゼロの嫌う言葉の一つだった。
基本的に構成術は性質を理解して仕事に応用するものだが、もし扱えなかったとしても効率がやや落ちることを我慢できれば労働上あまり問題はない。職種が限られる、構成術を持っている人間が採用の上で優先されがちな点を鑑みると、機会の面から不遇であることは否定できないが。

しかしエゼロの場合、障害となるのは仕事そのものではなく「契約」であった。労働に関してのみならず、入学手続きや官公署への書類の記入など、ヴェルティアスにおいてはあらゆる正式な書類に「構成術刻印」と呼ばれる本人確認の形式が用いられる。
これは構成術が各人に固有のものであることを利用し、その術式の唯一無二の設計図たる「刻印」を、特殊加工した用紙に刻みつけ

るというものである。障害で構成術を丸ごと失ったエゼロにはこれが不可能だった。また、構成術刻印に代わる身分証明の手段も未だ確立されていない。

よって、弊害はエゼロを職から遠ざけるだけに終わらなかった。一人暮らしをするための賃貸住宅の契約、連合政府の社会保険制度への加入、個人資産整理会社の口座の開設、高額な商品の購入など、生活に直結するあらゆる正式な手続きに困難が生じた。

特別な便宜を図ってくれるほど、各方面は生易しくもなかった。連合国政府から「障害者手帳」なるものを発行されてはいたが、代替の利かない本人確認ができないことには変わりがなく、エゼロ・カルダーノという人間はいつまでも社会に出ることができずにいた。

両親のいる実家で過ごし、彼らからもらう月いくらかのジェノームで遊び、日々の暇な時間を紛らわしていた。

社会において何の役割もアサインメントされないエゼロは、形式的立場の面で他の誰より無碍＞むげ＜であり、内容的な面で無下に惨めだった。ゆえに、仕事と学業の二つの言葉を激しく忌み嫌った。

メダルを入れる、リールが回る、レバーを倒す。メダルを入れる、リールが回る、レバーを倒す。

回る回る娯楽のリール。軽いベットを繰り返し、なるべく長く相手をさせる。どうせ買ったメダルは使い切る。ちっとも勝てないからだ。

エゼロにとって、娯楽はサブではなくメインだった。金銭の獲得手段としてではなく、一日の時間の大半を占めるものとして。

チカチカ煌めく電光、下へ下へと流れる絵柄、レバーは三回倒す、負けたらメダルを、買ったら回収してメダルを、照明術機がチカチカ、絵柄が下へ、レバーは三回、負けたら、メダル、買っても、メ

ダル、眩しい、照明、絵柄、レバー、メダル、負け、光、柄、負け……

操作する手に集中するエゼロの思考の一部分が、徐々に縮小していく。ただでさえ作業的な遊びだった。勝てないとなればなおさら単純である。逆に、余計なことを考えるのに割ける思考能力は増大した。頭が冴える。こんなときばかり。

スロットマシンを操りながら、エゼロの意識は過去の記憶を掘り起こした。

ヴェルティアスでは人の一部たる「構成術」を失った時の記憶である。人生を踏み外し、奈落への坂道を滑り落ち始めた頃の。

忌々しい。しかし、忘れずにはおられない記憶だった。

第三話：断崖世界の苦の談義　―１―（後書き）

前書きの登場人物の紹介欄にセリフ使うはずだったのに、台詞が一言もないという事故。
地の文オンリーでの表現ってのも、たまには必要かな。

今まで執筆した分の手直しをしたいので、次の話はやや遅くなるかと思います。ご了承ください。

３／１７　改行を追加しました。

第三話：断崖世界の苦の談義　―２―（前書き）

◆登場人物

「いらねぇよ。どうせ授業なんか出ないんだ。さっさと帰れよ」
　――構成術を失った青年　エゼロ・カルダーノ
「クラスメイトだから」
　――エゼロのクラスの学級長　シエタ・ナーヴェ

第三話：断崖世界の苦の談義　―２―

高等学校四年、秋。

ノイン第六高等学校の生徒たちは、来たる冬の大学入試選抜試験に備え、同級生らと競り合いながら日々学習に勤しんでいた。

ただし、「基本的には」を文頭に加えねばならない。

エゼロ・カルダーノ、フォスト・デル・フェッロをはじめとした幾ばくかの生徒は、その限りではなかった。学習内容についていくことのできない彼らは、宇宙からやってくる暗号を解読するに等しい授業から抜け出し、学校敷地内の目立たない場所でいつもくすぶっていた。

ヴェルティアスの中でも“医学都市ノイン”における学校制度は特殊である。正しくいえば、制度ではなく学校の扱いが独特である。

ヴェルティアス四大陸連合国の「教育法」によれば、通常、初等学校と中等学校の教育を受けることは義務とされ、高等学校、大学は任意で入学するものと定められている。

実際、ノイン以外の都市においては中等学校から高等学校へ進学する学生の割合は五十パーセント程度で、中等学校卒業後に就職する若者が少なくない。しかしノインでの進学率はほぼ百パーセントに達し、高等学校までが事実上の義務教育となっている。

高等学校の種別についても、機術都市ズィーベンには商業、工業系、水産都市ツェーンや港湾都市ドゥライには水産系、孤児＞みなしご＜都市フュンフには養護系などの高等学校があるのに対し、ノインではほぼ十割が進学校である。

ノインで誕生した子供はほとんどが高等学校まで進学し、さらに大学を目指して学習する。

だから、彼らのような落ちこぼれが発生する。全員が全員、大学を意識した高レベルな教育に対応できるわけではなく、かといって実業系の高等学校という逃げ道が用意されているわけでもない。低学力で何とかなる学校へ編入するには、都市単位での移動を余儀なくされる。

これは医学が高い水準まで発達したノインならではの現象である。高学歴の人材を多数輩出するノインだが、この現象のおかげで、医学都市でありながら治安が抜群に良いとはいえないのが現状だった。

そんな八方ふさがりな環境の中、エゼロやフォスト、その他の落ちこぼれた生徒たちにとって唯一まともに受けられる授業が体育だった。黒板を何行も横断する暗号文に目をやらず済むというだけで、体育は学業という名の不毛の砂漠に現れる希少なるオアシスとなった。

とある日の午前、体育の授業で、短距離走のタイムアタックが行われた。

体育教師の右腕が光り、校庭のインフィールドに向けて掲げられると、モグラが浅い地中を通過するように直線の走路が引かれていった。この体育教師の構成術は、地上に任意の図形を描写する能力であった。

出席番号順に整列した生徒たちが、教師の放つ機術ピストルの発砲音を合図として、二人一組で出走する。普段は授業に出席しない不良たちが紛れこんだことで、生徒の列は蛇行に蛇行を重ねていた。

エゼロとフォストは列の後尾のほうで彼らの様子を眺めていた。ヴェルティアスの高等学校では出席番号が募集時の出願順で決定するため、ギリギリまで進学先を決めあぐねていたエゼロやフォストは必然的に遅い番号を割り振られたのだった。ちなみに初等学校で

はアーチェティエ順、中等学校では誕生日順が主流である。

あと二、三組でエゼロの番になろうというときだった。

一人の不良が教師の合図の前に走り始め、フライングであるとしてやり直しを宣告された。もう一人の学生は正しくスタートして規定距離を走り切ったため、そのまま列から抜けることとなった。

エゼロは来たる発走に備え、靴紐の結び方を改めた。人付き合いは疎いというより疎んじている彼だったが、残り人数が三分の一ほどまで減り、不良由来の歪みが矯正されつつある列の中で、さしたる意図もなく隣の併走者に目をやった。

くすんだ金髪が靡く。フォスト・デル・フェッロが、頭一つ分の高みより見下ろしていた。

これまでに、授業でこの男と組むようなことはなかった。フォストはエゼロより三つ出席番号が遅く、二列縦隊に列をなすと、間の誰かが欠席でもしない限りは斜め後ろに位置取るのだった。

エゼロの列で先の不良がフライングを犯し、フォストの列の生徒が一人分ずつ順を詰めたことにより、犬猿が同じピストルを合図とする事態が勃発したのである。

走り終えて気を抜いていた生徒、迫る疾走に備え屈伸運動などしていた生徒、そしてピストルを握る教師、これに気付いた彼らの間を、引き千切れんばかりの緊張の糸が結びつけた。

エゼロとフォストのあまりにも険悪な仲は、クラス中どころか学校全体の知るところとなっていた。発火術機と導火線のようなものであった。触れ合って事無きに落ち着くはずがないと、その場の全員はみな一様に考えた。

体育らしからぬ沈黙が空気感染していく中、ピストルの乾いた発

砲音だけがどうにか等しい間隔を以って放たれていった。
一人の少女がひときわ二人の様子を不安がっていた。
宵闇を切り取ったが如き見事な黒髪を風に揺らし、体育の時間ですら眼鏡を着用するほど視力の危うい彼女は、名をシエタ・ナーヴェといった。彼女は誰よりも事態の丸い収束を願っていた。

生徒たちのこの時ばかりの事勿れ主義は、やがて盛大に打ち砕かれる。
エゼロとフォストは土に片膝をつき、両手を教師の引いた溝に合わせてクラウチングした。グラウンドを吹き抜ける微風のさざめきすら大嵐の轟音に感ぜられるような、徹底的な静寂がその一瞬に降りた。

用意、の掛け声、二人が腰を上げて静止する。フォストの右手が、小さく土を掻く。
引鉄が引かれる。エゼロとフォストは脚力を発揮して身体を持ち上げ、さらに前傾した重心を追いかけるように猛烈な加速をした。

エゼロは珍しいことに真面目だった。常ならば体育すら手を抜いて受けている。この時の異常な集中力に大した理由はなかった。周囲の異常な静けさに意識が研磨されただけかもしれない。
教師の描いたレーンの他端へ、重心を移しながら疾走した。二本の脚が思い通りに回転し、地面を後ろへ後ろへと流した。かき分ける空気分子に雑念の尽くが払い落されてゆくのを感じた。ひたすらに前を目指す。

――と、不意に起こったざわめきが空気と鼓膜を震わせた。
彼らがいま意を注ぐもの、それが自分であることを即時に鑑み、状況の把握に神経の一部を費やした。
フォストは回転数は悪いが長身を生かした大股で疾走していた。

彼の両手はきつく結ばれていた。そのうちの一方がエゼロに向けられ、開かれた。
黄土色の無数の粒が視界を遮る。次いで、顔中にチクチクと針を指したような痛みが広がり、衣服にバラバラとそれらが当たる音を耳にした。エゼロは思わず両瞼を閉じてその場に膝をつき立ち止まった。

砂を投げられたのである。
顔を覆った手の指の間から、痛みをおして片目を開け、今にも走りきらんとするフォストを苦々しげに睨んだ。エゼロ・カルダーノは気の短い男だった。加えて彼は高等学校入学以来「最も」をつけて偽りない良い気分で走っていたのだから、その憤怒はクラヴィテの海を一瞬で蒸発せしめて塩田にするほどに深かった。

目頭の分泌した液体が砂を洗い流した。
エゼロは右手に意識を集める。いつにもまして力強い光が、「構成術」による一方的暴力の予兆を校庭の一同に告げた。袋叩きにせんとする輩を、袋の内から掃滅しうる力である。
教師ですら手出しができなかった。所詮、「ペン」は「暴力」に勝てないのだった。後者を暴れ馬が得たならなおさらである。

屈み込むエゼロに駆け寄ろうとしたシエタ・ナーヴェは、反射的に眼鏡を外し、両耳を覆った。
聴覚への直接的なダメージもさることながら、音波エネルギーで破壊された物体の破片による二次的な被害もまた、エゼロの構成術の恐ろしいところだった。眼鏡など着用していれば、飛散したレンズの欠片によって、顔面はたちまち裂傷の赤いマスクを被ることになるだろう。

エゼロ本人を除いたグラウンドの全ての人間が、それこそ体育で

体操をするように、みな同じ動作で耳を塞いだ。
エゼロだけが、彼の構成術の始動音たる、細い鈴の音を聞いた。
――。
空気はまだ静止していた。

「ぐっ……」
人に聞こえる音、聞こえない音、いずれもこのグラウンドを震わすことはなかった。空間における音というレイヤーに、「無」がずっしりとその腰を落ち着けていた。
その沈黙を埋めるように、エゼロ・カルダーノが咆哮する。

「あああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

虚しい空間を音速で塗装したのは、構成術ではなく、声門より出でる「彼の音」だった。
頭蓋骨を穿孔され脳を撹拌されるような激しい頭痛が彼を襲った。圧し潰れるほどの腕力で頭部を押さえ、いつかフォスト達がそうしたように地面を右も左もなく転げ回った。
視界の中で天地は動転し、空の青、土の茶、木々の緑、校舎の白が目まぐるしくその目に映った。そのどれをも、今の彼は判別、認識できる状態ではなかった。

シエタが駆け寄り、上半身を支えた。彼女は、クラス中の誰からも忌避されるエゼロを分け隔てなく案じた。青天の霹靂に呆然とする教師を一声で醒まし、付近の生徒に担架の手配をさせ、今こそ復讐果たす好機と勇み寄って来た不良たちをたしなめた。
シエタの気丈な親切をつゆ知らず、エゼロは非凡なる痛みに耐えかね、彼女の腕の中でその意識をぷっつりと途絶えさせた。次に彼が目覚めるのは、校舎一階医務室の窓側のベッドである。

午後、秋風はやや風勢を増し、旧校舎医務室の立て付けの悪い窓を音を立てて揺らした。天候は雲量1を上回らない快晴、風は冷たいが、陽光はカーテンの網目をやすやすと突破してエゼロの目元にまで降り注いだ。

光と音の刺激に、エゼロは目を醒ました。

脳の真ん中を握りつぶすような激しい頭痛は、枕にでも吸い取られたかのように消失していた。

痛みが思考能力を鈍りに鈍らせ、苦悶したその時の周りの様子については全く覚えていなかった。惨めだ、とすら感じていない。その当時、自分の様子を見て誰が何を感じていたのか、それを現実感＞リアリティ＜をもって想像することが今のエゼロには不可能だった。

「やっと起きた。よかった」

パタン、と閉じられる音。

窓際に目をやると、そこには動作の機微に合わせてさらさらと揺れる黒い長髪の少女が、木製の椅子に腰かけていた。見覚えのある樹脂フレームの眼鏡をかけ直した彼女は、学級長シエタ・ナーヴェだった。

今さっき閉じられたものは本である。重厚な赤紫色をした表紙の背を目で追うと、

『古代語解読　クラト・ナパージュ　応用編』

とある。

クラト・ナパージュとは、高等学校二年から選択で受ける古代語の一つである。授業に出ないエゼロにとって内容はさっぱりだった

が、買うだけ買った教科書をパラパラとめくってみた限りでは、ミミズの這った跡にしか見えないおかしな文字と、定規で引いたような線の複合である堅苦しい文字を併用した、表記からして歪さの集積のような訳の分からない言語だった。

これは科目を選択した後に知ったことだが、クラト・ナパージュは鬼仏でいえば「金棒を所持した鬼」だそうで、エゼロはただでさえ学力がふるわないというのに、最も難易度の高い科目を選んでしまったということになる。

その宇宙言語の参考書を椅子に置き、シエタは立ち上がってベッドの際まで来た。エゼロは彼女と、窓から降り注ぐ光を避けるようにして、寝返りを打ち背を向けた。

「大丈夫？　まだ痛かったりする？　先生呼んでこよっか？」

シエタはただ聞こえていればいいと思って、その背中に声をかけた。

養護教諭はこのとき外出中だった。しかしおおかた職員室にいることだろうし、そうでなくとも必要があれば学校備品の最新式探知術機で探し出せる。探知術機は我が子を想う保護者たちの要望により設置されたものだが、敷地内の教員を探すこともちろん可能だった。

「うるせぇよ。お前がベラベラ喋ったら、また頭痛がするかもな」

辛辣に突き放す。

不良と学級長である。両者がやるかたなく対立する構図ならこれまでの創作物に星の数ほどあろうけれども、同調する話は奇をてらいにてらってしかありえない。

「も、もしまた始まったらごめんなさい……。で、でも今は大丈夫そうね。学校の連絡とか、いろいろと伝えることもあるし、少し我慢しててね」

シエタはそのために放課後からここに座っていたのだった。彼女の性格くらいは心得ていたエゼロは、そのことを薄々察してはいたが、「無駄なことに時間を使っていやがる」程度にしか感じていなかった。

「いらねぇよ。どうせ授業なんか出ないんだ。さっさと帰れよ」

そう言って、胸の悪い溜息をつき、頭をガリガリと掻きむしった。シエタは困り果ててまごついた。

医務室の三つのベッドを仕切る薄桃色のカーテンが揺れる。

「それはちょっとヒドいんじゃない？　その子、あなたを授業中たすけてくれたらしいじゃないの」

女性がカーテンを一息で開け放って現れた。

裾をバッサリと切り取ってアレンジした、一風変わった教職員用ローブを身に着ける彼女は、この高等学校の養護教諭である。大胆に露出するすらっと伸びた脚の魅力から、一部の男子生徒に熱狂的な人気があるという。

しかしローブに手を入れることは教職員の規則で禁止されており、その件で学校長と衝突することがあったようだが、前述の男子生徒の抗議によって泥沼化し、現在は特例的に黙認されているようである。

シエタの機転によって自分が速やかにここへ運ばれた事実を、エゼロはこのとき初めて知った。だが、だからといって簡単に彼の態

度が軟化することもなかった。

「恩に報いる性分じゃないのかもしれないけど、仇で返すのだけは、だめよ。うんうん」

養護教諭はそう諭しつつ、懐から一枚の小さな紙を取り出す。

「これを、休んだ分の授業の先生に提出しなさいね。これがあれば、あなた、サボりじゃなくて『真っ当に』授業を休んだことになるんだから。まぁ、体育以外、サボるか真っ当に休むかで全然出席しないのもどうかと思っちゃうけどね」

面倒だったが、一応は教諭をしている者の発行した書類ということで、エゼロは受け取った。枠で囲われた表の何段目かに、「病名」とあって内訳が下のように記されていた。

『頭痛』

頭部を砕き割られるような激烈な痛みのわりに、字に起こすと大したことのなさそうな印象である。

「私の出来る範囲で原因も調べてみたんだけどね、分からなかったのよ」

それは、養護教諭としての力不足というよりは、彼女の具える能力の限界だった。

この教諭は、患者の身体に触れることにより、体内で発熱を催す箇所を発見する構成術を有している。医務室を訪れる生徒のほとんどは、怪我をして外傷を負ったか、発熱を感知して病状を特定できるかの二つのケースであるため、彼女自身の能力に加えて、消毒、止血などの簡単な処置を覚えるだけで、養護教諭としての仕事は事が足りた。

しかしエゼロのような、発熱を検知できないケースでは手に余った。彼女は一時は本格的な医学の道に進むことも考えたが、このような構成術の限界に気付いて諦念し、この仕事を選択した。

「医療機関で診てもらった方がいいわね。紹介状、書いてあげるわよ。ゼーヴェ医術総合大学病院がいいかしらね。ちょっと待っててね」

親指と人差し指で「ちょっと」の隙間をつくって見せた後、彼女は退室した。医務室にエゼロとシエタだけが残る。

「どうしてそんなことをした？　学級長だからか？」

学級長、をやたらに誇張して言う。そんなこと、とはむろん体育の時間のシエタの行動だった。言葉の表の悪意を察した彼女は、しかし嫌な顔をせず、

「学級長というか、クラスメイトだから」

と飾り気なく返した。思う反応を得られなかったエゼロは、自らの精神が性質の悪い吐き気に見舞われるのを感じた。

衷心なのか、それらしく聞かせているだけなのか、いまいち測りきらないすました答えをする。これだから、この女は、いやだ。

「同じ名簿にたまたま並んでいただけだ、クラスメイトなんて」

エゼロは、学校という小社会の中で最初に席に着いたときのことをふと思い出した。「クラスメイト」とは、形式としてそれを表現する言葉と信じていた。「学校」もまた、学ぶための施設という辞書に載っているような意味を全てとしていた。それ以上が、理解できなかった。

「それは、誰だって初めはそうでしょうね。でもクラスメイトであ

ることって、とても強い絆だと思うな」

このときも、まだそうだった。絆で結ばれるような「クラスメイト」の在り方を、エゼロは受容できないでいた。子供だったからではない。学生時代のエゼロの思考には一切の湿りが存在せず、学生生活に支障をきたすほど考え方が原理的だったからである。

シエタをはじめとして、副次要素に塗り固められた「クラスメイト」の関係に身を置く人間は、エゼロにとってまるで別の生き物のようだった。

「ああ、馬鹿馬鹿しい」

言って、制服の着崩れを直し、ベッドから這い出て帰り支度を始めた。シエタは慌てて引き留める。

「先生が紹介状を持ってきてくれるのよ。もう少し待って！」

彼女の言葉は虚空に消え、エゼロは医務室から出て行った。

病院に罹る気などなかった。面倒だし、今後再発するとも限らない。病院――意味や成り立ちも分からないまま、社会が自分をいいようにいじる筆頭のように思われて、好きではなかった。

好き嫌いで取捨を選べるうちは、まだよかったのだろうと思う。

第三話：断崖世界の苦の談義　―２―（後書き）

深夜一時とか二時に半分寝ながら書いた文章です。何日かに分けて。でももしかしたら眠りかけの方が良い文章が書けるんじゃないかって思ったりもするんですよ。
目が冴えてると思いつかないような突飛な表現が浮かんだり、とかね……。
寝言？

３／１７　改行を追加しました。
「クラト・ナパージュ」の元ネタは……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4410q/

殺人鬼の美談

2011年3月23日05時23分発行